不満足先生のARC―V

ナスの森

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

一発ネタです。

もし５Ｄ’ｓの鬼柳京介がクラッシュタウンではなく、エクシーズ次元にたどり着いたら、という思い付き。

目　次

エクシーズ次元 ―― 1
毒竜　対　魔竜 ―― 11
開く冥府の瞳 ―― 22
インフェルニティ ―― 35
レジスタンス ―― 49
ユートの葛藤 ―― 60
その心に、一歩…… ―― 70

エクシーズ次元

ダークシグナー。
シグナーと呼ばれる者達と相反する力を持ちし者達。
彼らは五千年周期でシグナーと戦いを繰り広げ、そのメンバーは冥界の王によって選ばれる。
そのシグナーとダークシグナーの戦いの幕が下ろされ、その戦いで冥界の王が撃破された事により、彼らダークシグナーの魂は再び現世に生けるべき者として復活を遂げた。
これはその者達の内の一人……かつてチーム「満足（サティスファクション）」を率いた男が、突如たどり着いた異界にて己の「満足」を取り戻す物語である。

◇

「ここは……？」
再び意識が浮上した時、目に映ったのは、かつて自分がいた頃のサテライトのような場所だった。
「ゼロ・リバース」により建物や道路などが崩壊し、周囲に人の気配は大凡感じられない。
ここは一体……と、男は周囲を見渡す。
「……って、何だよここ……あん時のサテライトよりひでえじゃねえか!?」
周りを見渡してみたら、よく見たらかつてのサテライトよりも荒廃した町の様子に男……鬼柳京介は困惑する。
いや、これは荒廃しているというよりは……まるで戦争でも起こったかのような惨状であった。
（いや、それよりも俺は何でこんな所に……？　見た所サテライトじゃねえし、俺はついさっきまで……）
鬼柳はつい先ほどまで自分がいた場所を思い出す。
チーム・満足（サティスファクション）がサテライトを統一後、サテライトで起こってい

たデュエルギャング同士の抗争は収まった。
それによって彼が率いたサティスファクションのメンバーは再び散り散りとなって、再び無気力な生活が戻ってきた。
そこから数年余りが立ち、ようやくシティとサテライトを繋ぐ橋が建造された事により、シティとサテライトの行き来が自由になり、更にサテライトの復興までもが進んだ。
今までサテライトの中でしか満足する事はできないと思っていたい鬼柳は、サテライトの外……まだ見ぬ世界への興奮を抑えきれず、かつての仲間に一言挨拶した後にサテライトの外へと旅立った。
そして自分はその旅の途中……気が付けばこの場所にいた。
――――一体、ここは何処なのだろうか？
「……考えても、埒が明かねえか」
元々、物事をそこまで細かく考える性格でもなかった鬼柳は、まずは自分の持ち物をチェックする。
デュエルディスク……なし。
デッキ……あり。
何故持ち歩いてた筈のデュエルディスクがないのかは疑問であったが、デッキは変わらず手元にあったことに取りあえずはホッとする鬼柳。
（とりあえず、人を探してみるか。ここに人の気配はねえみたいだし、まずはそれが先決だ）
何故自分がここにいるのかはまだ分からない鬼柳であったが、冷静に考えをまとめ、崩壊した町の散策に乗り出す。
その惨状に少し顔を歪めつつも、歩き始めて数分の後……通りかかった瓦礫の隙間から奇妙な物が見えた。
「あれは？」
それに気付いた鬼柳はそこへ走り寄り、瓦礫を退けてソレを拾い上げる。
（これはデュエルディスク？　それにしちゃあ随分と小型だが……ん？）
拾い上げたデュエルディスクらしき物を観察していたその時、その

デュエルディスクのエクストラデッキ入れらしき所から一枚のカードが落ちた。
鬼柳はそのカードが地面に堕ちる前にキャッチし、そのカードを見る。
カード名は、「ラヴァルバル・チェイン」

そして――――

「これは……黒い枠のカード……一体……ぐぅッ!?」

そのカードを見た時、ズキンと、鬼柳の頭が痛む。
黒い枠のカード、左に揃えられたレベル表記らしきもの。
そのカードのそれらの要素が、鬼柳の、脳裏を刺激する。

これはいったいナンダ?

なぜこのカードをみるだけでこうも頭痛がする。
なぜこのカードを見るだけでもこうも胸が苦しくなる。

「ガ、ァ、アアぁッ……」
頭痛は収まる事を知らず、更に鬼柳の脳裏を刺激する。
まるで、呼び起こしてはならない記憶は呼び覚ますかのように。
頭痛がする。
吐き気がする。
そのカードを見るだけで、思い出してはいけないナニカを思い出しそうになる。
そして、その記憶の一端が、垣間見えた。
黒いそのカードが、一瞬だけ、鬼柳の中に呼び覚まされた一枚のカードと重なり、フラッシュバックした。

「ワンハンド……レッドアイ……ドラゴン……」
黒いカード枠。
左側に寄せられたレベル表記らしきもの。
その結果、鬼柳の頭の中で連想されたのは、黒いカード枠のドラゴンだった。
――――黒いカード。
――――ダークシンクロ。
――――ダークシグナー。
次々と、鬼柳の脳裏の中で単語が連想されていく。
その度に、頭痛と胸痛が激しくなる。
そして――――

『人々の魂を生贄に、降臨せよ！　地縛神Ｃｃａｐａｃ　Ａｐｕ!!』

ナスカの地上絵を模った炎のサーキット。
その炎の中にいた人達が、次々と一枚のカードの生贄となっていく。サテライトの人々が次々と生贄として空中に出現した黒い物体に吸い込まれ、そこから巨大な光の柱が発生する。
天にも届く光の柱の中から、黒い巨人が姿を現す。

「あ……あァ……」
頭を抱える鬼柳。
思い出してしまった　全て。
チーム満足（サティスファクション）の時の本当の記憶。
ダークシグナーの事。
地縛神の事。

それらは皆、鬼柳自身の拭い難い罪だった。
「あああああアアアアアアアアアアあぁッ!!!」

◇

――ハァ、ハァ、ハァ……。
荒廃した町の中、一人の少女が息を上げながら走っていた。
ポニーテールの黒い長髪を揺らしながら、少女、黒咲瑠璃は今、崩壊したハートランドの街中で、必死に追手を撒かんと逃げていた。
「ハァ、ハァ、ハァッ……!」
追手はアカデミア……この次元ではまた違う召喚法、融合召喚を操る別次元からの侵略者。
そのアカデミアの追手に、彼女は今追われていたのだ。
その追手に、彼女は見覚えがあった。
(あの人は……ついさっきデニスさんと一緒にいた!!)
デニスという大道芸のデュエルリスト。
先ほど偶然、難民キャンプでそのデニスと再会し、その時は喜んだ瑠璃であったが、こうして今そのデニスの傍にいた難民らしき人物に追われていたのだ。
いや、既に難民というには語弊がある。
アカデミアのデュエルディスクを構えながら此方に迫ってくるときの、彼の表情。あれはまさしく狩りの獲物を捉えた時の眼そのもの。
彼は難民ではなく、難民を装って難民キャンプに入り込んだアカデミアのデュエリストだったのだ。
――逃げなきゃ。
此方が難民キャンプを出ている時の隙をついて現れた彼のその眼を目の当たりにし、そう思った時にはもう足は動いていた。
幸い、此方はハートランドの地形を完全に把握している。
相手がどんな使い手であろうと容易に撒けると高を括っていた。
しかし――

「――――ッ、行き止まりッ!?」
それはあくまで、以前の平和なハートランドならではの話。
いくら地形を把握していた所で、ハートランドはアカデミアの侵略によって無惨にもその形を変えている。
目の前に立ち塞がった瓦礫を前に、瑠璃は成す術もなく立ち止まってしまった。
「どうしたの？　鬼ごっこが好き？」
「ッ!?」
ねっとりするような、それでいて何処か聞き覚えのあるような声が後ろから木霊する。
まるで毒蛇に睨まれたかのような錯覚に陥りつつも、瑠璃はその声の主の方へ振り向く。
そこには、黒いフードを纏ったアカデミアの追手がいた。
「あんまり手こずらせないでよ。僕、楽しい事は好きだけど面倒事は嫌いなんだよねぇ」
「くッ！」
よく言うわね、と瑠璃は内心で毒吐く。
――――さっきまで、逃げる私を見ながら楽しんでいた癖に。
おそらくその鬼ごっこすらも飽きて面倒になった、という事なのだろう。狩りを楽しむのではなく、こうして相手をじっくりと追い詰める事を楽しむこの人物は、今まで戦ってきたアカデミアの戦士よりも質の悪い人物である事が窺えた。
（こうなったら……もう……）
デュエルしかない。
この人物も紛れもなくアカデミアの人間。
ならば、デュエルでこの場を切り抜けるしかない。
そう結論付けるや否や、瑠璃はデュエルディスクを構えた。
「やろうっていうの？」
「……ええ」
ここで敗れる訳には行かない。
自分には待っている人達がいる。

恋人、兄、そして大勢のレジスタンスの仲間たち。
彼らの所に帰るまで、自分は負けるわけには行かない。
「まるでじゃじゃ馬だな。いいよ、やろう。君とデュエルをして僕が勝ったら言う事を聞いて貰う……いいね？」
「えぇ……その代わり、私が勝ったら――――」
「少なくとも、この場は退いてあげる。また直ぐに来ちゃうかもしれないけどねぇ……！」
「ッ！」
悪趣味げに笑う、自分と同じくらいのアカデミアの追手を見ながら、瑠璃は少し歯ぎしりをする。
自分が勝ったら拘束させてもらう、とは口が裂けても言えなかった。
よしんばデュエルに勝った所で、自分程度の女では、この少年を拘束する事は不可能だという、瑠璃なりの英断だった。
「それじゃあ、デュエル――――」

「待ちな……」

「えっ……？」
その時だった。
黒フードの少年と、瑠璃の間を割って入るように、一人の男が現れる。
長い銀髪、黒いロングコート。
まるで辺りを彷徨う亡霊の如く、フラっと、その男は現れた。
ごくりと、瑠璃は息を飲む。
自分を追って来たこの黒フードの少年とはまた違う意味での異様な存在感を放つ男。まるで生気を感じさせぬその瞳には、何も映ってなどなかった。

「あ、貴方は……？」
「……」
瑠璃の問いに、男は答えない。
まるで眼中にないかのように、目の前のフードの少年を見つめる。
「……ハァ、何なのさァ君。いきりなり割り込んできて。今はいい所なんだから、邪魔しないでよ。彼女は僕が目を付けたんだ、横取りをしようったって、そうは行かないよ？」
若干、苛つきを感じさせるような表情で、黒フードの少年は男を睨む。
「何を取りたいのか、別に知った事じゃねえが……」
言って、男は懐からデュエルディスクを取り出す。
先ほど、瓦礫に埋まっていた物を拾った奴だった。
損傷こそしているものの、デュエルをするにはこれと言って支障はない程度のレベルである。
「デュエルなんて聞いちゃ、黙っていられねえんだよ」
そう言って、男は懐から出したデュエルディスクを腕に装着し、展開する。
その様子を見た黒フードの少年は、心底鬱陶しそうな眼で男を見る。
自分はプロフェッサーの命令でそこにいる少女を連れてくるように言われているのだ、こんな死人のような男に用などない。
「だから、邪魔だって言ってるじゃん。これは僕と彼女の問題だ。そんなにデュエルをしたいなら、相応の相手を呼んで――――」
「ここ等にいた仮面野郎共なら、とっくに倒したよ」
「……へぇ」
この男が退いてくれる様子もないと判断した少年は、一緒に連れてきたオベリスク・フォースに押し付けようと、ディスク内臓された連絡機能で呼び出そうとした。が、男の予想外の一言に、少年はようやく男に関心の目線を向けた。
「倒したって……あのオベリスク・フォースを!?」
「ようやく人を見つけたと思ったら、一斉にデュエルを仕掛けられて

な。ヤベエデュエルの予感がして受けてみたんだが……とんだ期待外れだった」
期待外れ……それは自身を熱くさせる相手でなかった事に対してではなく、自身をデュエルで葬ってくれる相手ではなかったことに対する失望だった。
「負ければすぐにでも解放される事ができたってのに、それさえもできなかった。つくづく、俺はデュエルに取り憑かれているらしい」
「……？」
まるで、自身を呪うかのような、失望するかのような言い方に、瑠璃は違和感を覚える。
先ほどの口上からして、この人物はおそらくあのアカデミアの精鋭、オベリスク・フォースを退け、ここまでやってきたのだろう。
なのに、この人物から、勝った事に対する歓びが微塵も感じられないのだ。
まるで、勝ってしまった自分を呪うかのように。
「俺は、ヤバいデュエルを求めてここまで来た。デュエルにとりつかれた俺を、デュエルごと消し去ってくれる奴を求めてな……さあ、やろうぜ？」
「フフフ、いいよ。そこまで求められちゃ、応じない訳にはいかない。君の望み通り、デュエルで葬ってあげるよ」
互いにディスクを構えだす。
（どうすれば……）
そんな二人を見て、瑠璃は困惑する。
本来なら自分がこの少年とデュエルする筈が、突如、正体不明の男に割り込まれ、その男が少年とデュエルする事となった。
瑠璃が取れる選択肢は二つ。
一つ、この場で二人のデュエルを見守る。
二つ、この場から逃げて急いで応援を呼ぶ。
しかし、この男が何者なのかが分からない瑠璃は、そのどちらの選択肢も取れないでいた。見た所、自分を助けに来たというわけではないようである。

もし彼もアカデミアなのだとしたら？
このやりとりすらも二人の演技に過ぎない場合は？
そもそもこの人は何者なのか？
疑問が尽きぬ内は、瑠璃もどの選択肢を取ればいいのか分からなかったが――――
「ああ、そこの君。そこから動かないでね。このお兄さんを倒したら、後で君も相手してあげるからさぁ」
「っ!?」
少年の一言で、何方の選択肢も消える事となった。
ここで逃げても、この少年は地の果てまで自分を追ってくる。
ここで逃げようとしたら、自分は更なる地獄を見る事になる……そんな予感がしたのだ。
動きかけていた瑠璃の足が、ピタリと止まる。
「いい子だ。さあ、やろうか、お兄さん？」
「ああ」

「「デュエル」」

――――俺を、満足させてくれよ……？
五枚ドローした手札を尻目に、男……鬼柳京介は虚ろな目で目の前の少年に内心でそう懇願した。

毒竜　対　魔竜

「先行はオレが貰う。手札から魔法カード『手札抹殺』を発動」
先行は鬼柳のターンだった。
先ほどのオベリスク・フォースとのデュエルでは後攻だった彼は、相手が先行でドローをしなかった事に倣い、彼も先行でドローはしていない。
(どういう訳か、オレがいた所とここではルールに多少の違いがあるようだな……)
まるで本当に異世界に来たようだ、と鬼柳は思う。
しかし、異世界であるにせよ何にせよ、そこで自分を葬ってくれるかもしれないデュエルがあるのだというのであれば鬼柳にとってはまさしく本望であった。
「互いのプレイヤーは手札を捨て、その後捨てたカードの枚数分ドローする。オレが捨てた手札は四枚、よって四枚ドロー」
「僕の手札は五枚、よって五枚ドローする」
手札抹殺の効果により互いに手札を捨て、その枚数分ドローする鬼柳と黒フードの少年。
「モンスターをセット。そしてカードを三枚伏せてターンエンドだ」
「一気に手札を使い切って大丈夫なの？」
「……」
手札抹殺で手札を入れ替えたと思いきや、その四枚の手札のカードを全て伏せるだけという目の前の男の慎重を通り越したプレイングに黒フードの少年は疑問を投げかける。
が、鬼柳はその疑問に答えず、じっと少年を見つめる。
その視線の意図こそ分からないが、その瞳はお前のターンだよ、と急かしている気がした。
「まあいいさ。僕のターン、ドロー」
少年　手札：5→6
「僕は手札から『捕食植物(プレデタープランツ)オフリス・スコーピオ』を召喚」
少年がデュエルディスクにカードを置くと同時に、植物で出来たか

のようなサソリがフィールドに現れる。
《捕食植物オフリス・スコーピオ》
効果モンスター
☆３／闇属性／植物族／攻１２００／守８００
「『オフリス・スコーピオ』の効果発動。このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、手札からモンスター一体を墓地へ送る事で、デッキからオフリス・スコーピオ以外の捕食植物モンスター一体を特殊召喚する。来い、『捕食植物スピノ・ディオネア』！」
《捕食植物スピノ・ディオネア》
効果モンスター
☆４／闇属性／植物族／攻１８００／守０
「バトル。『スピノ・ディオネア』でセットモンスターに攻撃」
「セットモンスターはディープ・ダイバー。守備力は１１００、よって破壊される」
《ディープ・ダイバー》
効果モンスター
☆３／水属性／水族／攻１０００／守１１００
「スピノ・ディオネアが自身のレベル以下のモンスターと戦闘をした時、ダメージ計算後にデッキからスピノ・ディオネア以外のモンスターを特殊召喚できる。僕はデッキから、捕食植物ダーリング・コブラを守備表示で特殊召喚！」
《捕食植物ダーリング・コブラ》
効果モンスター
☆３／闇属性／植物族／攻１０００／守１５００
「更にダーリング・コブラの効果発動。このカードが『捕食植物』モンスターの効果によって特殊召喚された時、デッキから『融合』魔法、または『フュージョン』魔法１枚を手札に加える。僕は『融合』を選択し、手札に加える」
少年　手札４　→　５
「ゆう、ごうッ……!?」
デッキから加えたカードを、少年は鬼柳……ではなく、その後ろに

いる瑠璃に見せた。
案の定、瑠璃は怯えたような表情でそのカードを見る。
怯えと……微かな憎悪を込めた瞳になっていく。
「フフ、いいねえ、その恐怖と憎悪が入り混じったような表情……このお兄さん、さっきから全然表情変えないし、さっさと終わらせて君とデュエルしたいなぁ……！」
「ッ！」
まるで瑠璃のそんな反応が見たいがために、《融合》の魔法カードを見せようとしたような口ぶりの少年。
デュエルの相手を見ず、自分だけが楽しもうとするその姿勢に、鬼柳はかつての自分と重ねて少し眉を潜めた。
「さあ続きだ。『オフリス・スコーピオ』でお兄さんにダイレクトアタック！」
「ッ！」
鬼柳京介
ＬＰ４０００　→　２８００
攻撃力１２００といえど、リアルソリッドビジョンのモンスターによるダイレクトアタック。さしもの鬼柳も表情を少しばかり苦悶に歪めた。
「ディープ・ダイバーが破壊されたターンのバトルフェイズ終了時、自分のデッキからモンスターカードを選び、デッキトップに置く。オレは『インフェルニティ・デーモン』を選択し、デッキトップに置く」
「なるほど、そのモンスターで何かを狙ってるわけかな？　僕はカードを二枚伏せターンエンド」
少年　手札５　→　３
「オレのターン、ドロー」
鬼柳　手札０　→　１
「たった今ドローした『インフェルニティ・デーモン』の効果発動。手札が０枚の時にこのカードをドローした場合、このモンスターを特殊召喚できる」
《インフェルニティ・デーモン》

☆４／闇属性／悪魔族／攻１８００／守１２００
「更に、このモンスターの特殊召喚時に自分の手札が０枚の場合、デッキから『インフェルニティ』と名のつくカード１枚を手札に加える。俺は『インフェルニティ・ミラージュ』を手札に加え、そのまま通常召喚する」
《インフェルニティ・ミラージュ》
効果モンスター
☆１／闇属性／悪魔族／攻０／守０
無手札必殺（ハンドレス・コンボ）――――鬼柳が得意とする、ノー手札で相手を抹殺する技。
「手札が０枚の時に『インフェルニティ・ミラージュ』をリリースする事で、墓地の『インフェルニティ』モンスター２体を特殊召喚できる。出でよ、『インフェルニティ・ドワーフ』、『インフェルニティ・デストロイヤー』！」
《インフェルニティ・ドワーフ》（守備表示）
効果モンスター
☆２／闇属性／戦士族／攻８００／守５００
《インフェルニティ・デストロイヤー》
効果モンスター
☆６／闇属性／悪魔族／攻２３００／守１０００
「手札０枚の状態から、たった一ターンでモンスターを３体!?」
その光景に、後ろから見ていた瑠璃は驚愕の声を出す。
ここエクシーズ次元の人間は、エクシーズモンスターの素材の為に一ターンで下級モンスターを複数召喚する事はあれど、それはあくまで手札がある前提での話だ。
手札がどれだけ少ない状態でそれを成しても驚かない自信は瑠璃にはあるが、手札０枚の状態からそれを成すというのはさしもの瑠璃でも見た事がなかった。
今鬼柳の相手をしている少年も前のターンでモンスターを一気に三体召喚していたが、今鬼柳がやったように手札０枚の状態でそれを成す事に比べれば大して驚くべきことではなかった。

「バトル。まずはインフェルニティ・デストロイヤーで捕食植物スピノ・ディオネアに攻撃」
四足歩行でスピノ・ディオネアに飛び掛かったインフェルニティ・デストロイヤーが、スピノ・ディオネアを撃破する。
少年ＬＰ４０００　→　３５００
「更に、手札０枚でインフェルニティ・デストロイヤーがモンスターを破壊した時、相手プレイヤーに１６００ポイントのダメージを与える」
「なっ!?」
「１６００のダメージ!?」
スピノ・ディオネアを破壊した直後、鬼柳のフィールドに戻らずに少年の前に立ったインフェルニティ・デストロイヤーの身体から、紫色の炎弾が放たれる。
「ガぁッ!?」
少年ＬＰ３５００→１９００
少年の身体が吹き飛ぶ。
モンスターを破壊されるだけならばいざ知らず、１６００ダメージの追撃は痛かった。手札０で発動するという限定的とはいえ、強力な効果である。
「更にインフェルニティ・デーモンでダーリング・コブラに攻撃。この瞬間、インフェルニティ・ドワーフの効果発動。手札が０枚で、このカードが表側表示で存在する時、オレのモンスターに貫通能力を与える。ヘル・プラッシャー!」
インフェルニティ・デーモンが目の前に魔法陣を展開させると同時、ダーリング・コブラの頭上から同じ魔法陣が現れ、そこから巨大な手が降ってくる。
とても攻撃力１８００とは思えない攻撃演出のソレに、ダーリング・コブラは成す術もなく潰されてしまった。
「手札０の時に、１６００ダメージに加えて、貫通効果まで……そうか、それがお兄さんの戦い方ってわけか」
少年　ＬＰ１９００→１６００

インフェルニティ・デストロイヤーの追撃によるダメージで、苦しそうにしながらも立ち上がる少年。
しかし、その口元にあるのは笑み。
強敵と戦える事による昂揚――――ではなく、そこにはどの道自分が勝つ事に変わりはないという自信故のものだった。
「ターンエンドだ」
「フフフ。お兄さん、中々やるね。なら、僕も少し本気を出しちゃおうかなぁ、ドロー！」
少年　手札３　→　４
勢いよくカードを引き、少年は状況を確認する。
今相手の手札は０。しかし場には攻撃表示モンスターが二体と、守備表示モンスターが一体。更にどれもが手札０枚で発動する強力な効果を持つモンスターばかり。
更に場には三枚のカードがセットされている。
そして今、自分の手札が４枚。セットカードは２枚
そして相手の先行で発動された「手札抹殺」の効果により墓地に送られた五枚のカード。そして先ほど破壊された二体のモンスター、合計七枚のカードが存在する。
いずれにせよ、このターンで決着を付けるのは無理そうである。
だが、別に構わない。
どうであれ、最後に勝つのは自分なのだから！
「僕は墓地の『捕食植物（プレデター・プランツ）コーディセップス』の効果発動。墓地のこのカードを除外する事により、墓地のレベル４以下の『捕食植物』モンスター二体を特殊召喚する。出でよ、『捕食植物セファロタスネイル』、『捕食植物（プレデター・プランツ）テッポウリザード』！」
《捕食植物（プレデター・プランツ）セファロタスネイル》
効果モンスター
☆４／闇属性／植物族／攻１３００／守１２００
《捕食植物（プレデター・プランツ）テッポウリザード》
効果モンスター
☆３／闇属性／植物族／攻１２００／守１２００

「『テッポウリザード』の効果発動。このカードが墓地から特殊召喚に成功した時、デッキからカードを一枚ドローする」
少年　手札４　→　５
「そして僕は手札から魔法カード『融合』を発動！」
「融合……」
再び、怯えるような表情になる瑠璃。
彼女とて、融合召喚そのものに罪がない事は分かっていても、この感情を払拭させる事は出来なかった。
「僕はセファロタスネイルとテッポウリザードで融合。
魅惑の香りで虫を誘う二輪の美しき花よ！　今一つとなりて、その花弁の奥の地獄から驚異を生み出せ！
――――融合召喚!!」
ユーリの背景に現れたうずまき状のエフェクトに、場に現れた二体の捕食植物モンスターが取り込まれていく。
「現れろ！　飢えた牙持つ毒龍！　レベル８、『スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン』！」
現れたのは、捕食植物で形成されたような。禍々しき毒竜だった。
《スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン》
融合・効果モンスター
星８／闇属性／ドラゴン族／攻２８００／守２０００
トークン以外のフィールドの闇属性モンスター×２
「スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴンの効果発動！　このカードが融合召喚に成功した時、このカードの攻撃力はターン終了時まで、相手フィールドの特殊召喚されたモンスターの攻撃力の合計分アップする！　君の場の特殊召喚されたモンスターの合計の攻撃力は４９００……よってスターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴンの攻撃力は７７００となる！」
《スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン》
攻撃力２８００　→　７７００
「７７００……そんなっ!?」
「更にスターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴンのもう一つの効果

発動！　１ターンに１度、相手フィールドのレベル５以上のモンスター１体の効果を無効化し、その効果をターン終了時まで得る。僕は君のインフェルニティ・デストロイヤーを選択し、効果を得る！」
「遊星のセイヴァー・スター・ドラゴンと同じような効果か……」
「君のモンスターの効果は手札が０枚の時に発動するものだからあまり意味はないけれど、念のためね。僕はオフリス・スコーピオを守備表示にして、バトルだ！　スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴンで、インフェルニティ・デストロイヤーに攻撃！」
　この攻撃が通れば、鬼柳のライフはあっという間に尽きてしまう。が、ここで終わるようであればチームサティスファクションのリーダー等務まる筈もなかった。
「永続罠カードオープン！　銀幕のミラーウォール！　攻撃してきたモンスターの攻撃力は半分となる！」
《スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン》
　攻撃力７７００　↓　３８５０
「だが、攻撃力は上回ったまま。このまま破壊させてもらおうか！」
「……ッ！」
　鬼柳　ＬＰ２８００　↓　１２５０
「この瞬間、墓地のインフェルニティ・リヴェンジャーの効果発動。手札がゼロでオレのモンスターが破壊された時、このカードを特殊召喚する。この効果で召喚したインフェルニティ・リベンジャーのレベルは、破壊されたモンスターと同じになる」
《インフェルニティ・リベンジャー》（守備表示）
　効果モンスター／チューナー
　☆１↓６／闇属性／悪魔族／攻０／守０
「……何をするつもりなのか知らないけど、まあいいよ。『コーディ・セップス』の効果を使用したターンは通常召喚できない。僕はカードを一枚伏せてターンエンド」
　少年　手札４　↓　３
「俺のターン、ドロー」
　鬼柳　手札０　↓　１

「『銀幕のミラーウォール』は、ライフコストを２０００払わなければ維持できない、よって破壊される」
　鬼柳の残りのライフでは『銀幕のミラーウォール』の維持コストは払い切れず、鏡の壁は、パリン、と音を立てて砕け散っていった。
「俺は『インフェルニティ・ネクロマンサー』を召喚。このカードは召喚に成功した時、守備表示になる」
《インフェルニティ・ネクロマンサー》（守備表示）
　効果モンスター
　☆３／闇属性／悪魔族／攻０／守２０００
「そしてレベル２のインフェルニティ・ドワーフに、レベル６となったインフェルニティ・リベンジャーをチューニング」
「……チューニング？」
　聞き慣れない単語に、瑠璃は思わず訝しむ。
　一方、少年は眉を潜めながら、まさか、と思いその光景を見つめた。
　インフェルニティ・リベンジャーが六つの光の輪に変化し、その輪にインフェルニティ・ドワーフが飛び込む。
　瞬間、インフェルニティ・ドワーフは二つの光へと変化し、やがてその輪の中を大きな光が迸る。
「死者と生者、ゼロにて交わりし時、永劫の檻より魔の竜は放たれる！
　――――シンクロ召喚！　出でよ！　レベル８、『インフェルニティ・デス・ドラゴン』！」
《インフェルニティ・デス・ドラゴン》
　シンクロ・効果モンスター
　☆８／闇属性／ドラゴン族／攻３０００／守２４００
　迸る光より、お世辞にも見た目が良いとはいえないドラゴンが現れる。頭の上の花弁のような所の中心には半分露出した脳みそが見えており、スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴンとはまた違った禍々しさを持ったドラゴンであった。
「インフェルニティ……デス・ドラゴン……」
　融合召喚でも、エクシーズ召喚でもない、自分がまったく知らない召喚法で出されたそのドラゴンを、瑠璃はまじまじと見た後、再び鬼

柳の背中を見つめた。
――――本当に、彼は何者なの？
「シンクロ召喚……なるほど、君はシンクロ次元の……」
「手札が０枚の場合、１ターンに一度戦闘を放棄し、相手のモンスターを一体を破壊し、破壊したモンスターの元々の攻撃力の半分のダメージを相手プレイヤーに与える」
「いいのかい？　言っておくけど、スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴンは、破壊された時、相手の場の特殊召喚されたモンスターを全て破壊し、その攻撃力の合計分のダメージを相手プレイヤーに与える。そのドラゴンの効果で破壊しようとどっちみちお兄さんの負けだよ？」
「インフェルニティ・デス・ブレス！」
少年の忠告を無視し、鬼柳は効果名を宣言して、自分のエースモンスターの効果を発動する。
……まるで、自ら死に行くように。
『インフェルニティ・デス・ドラゴン』の口から放たれた青白いブレスは、『スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン』に命中し、暴発する。
「アハハ！　本当に死にたがってるんだね、お兄さん！　いいよ、ならば罠カードオープン、『エネルギー吸収版』！　自分が受ける効果ダメージを回復に変換する！」
少年　ＬＰ１６００→３０００
「そして『スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン』の効果発動！　お兄さんの場の特殊召喚されたモンスター達を破壊！」
スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴンの暴発した跡から、毒液のようなものが飛び出す。
飛び出した毒液は二本の流れに分かれ、インフェルニティ・デス・ドラゴン、インフェルニティ・デーモンのそれぞれに向かい、命中した。
「これによりお兄さんは３０００と１８００、合計４８００のダメージを受ける！　あまりにあっけないけど、これで僕の勝ち――――」

その瞬間、チャキ、という音が少年の間近で響く。

「なっ――――」

あまりにも突然の事に言葉を失う少年の眉間には――――死神の使者の銃口が突き付けられていた。

To be continue……

開く冥府の瞳

鬼柳：
ＬＰ　１２５０
手札　０枚
フィールド　インフェルニティ・ネクロマンサー（☆３）
伏せカード２枚
少年：
ＬＰ　３０００
手札　３枚
フィールド　捕食植物オフリス・スコーピオ（☆３）
伏せカード２枚

「なっ――――」
いつの間にか、己の横に立っていた髑髏面を被った長身の男。
髑髏面の奥から見える赤色の眼光が、少年に殺気を向けながら、眉間に銃口を突き付ける。
あまりにも突然の出来事に、少年は言葉を失う。
「手札がゼロで効果ダメージが発生した時、墓地にいるこの『インフェルニティ・デス・ガンマン』を取り除き、その効果ダメージを無効にする」
『インフェルニティ・デス・ガンマン』……それが今少年の横に立って銃を突き付けて来るモンスターの名前らしい。
最初のターンの手札抹殺で捨てた鬼柳の四体のモンスター達の内の、最後の一体である。
「そして、相手は『インフェルニティ・デス・ガンマン』の効果を選択できる」
「な、何を……っ!?」
突き付けられた銃の撃鉄が引き起こされる音を聞き、少年の頬を冷や汗が逆る。
「今からオレは、デッキの一番上のカードを引く。それがモンスター

カードだった場合、このターン、お前は俺が受けた効果ダメージと、無効化した効果ダメージの合計分のダメージを食らう」
説明しながら、デッキの一番上のカードに手を添え、カードを引く準備をする鬼柳。
隣に立つ『インフェルニティ・デス・ガンマン』の銃の引き金も引き絞られ、ライフが有利であるにも関わらずまるですぐそこに己の死が迫っているような錯覚に陥りそうになる。
「引いたのがモンスターカードでなかった場合、俺はこのターン受けた効果ダメージ分のダメージを受ける。つまり、テメエのドラゴンの効果で発生した効果ダメージを、何方かのプレイヤーが受けるって訳だ。
そして、この選択を拒否した場合、お前はこのターン、効果ダメージを与える事はできない
――――さあ、どうする？」
「っ！」
選択を迫られ、少年は隣にいる『インフェルニティ・デス・ガンマン』を見やる。
己よりも遥かに背の高い長身の男が、銃を突き付けながら己を見下ろしてくる。
（アイツのデッキの一番上のカードがモンスターカードじゃなかった場合、『スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン』の効果ダメージで、アイツのライフはゼロになる。けれど、）
だが、もしもだ。
あのデッキの一番上のカードがモンスターカードだった場合の、己の敗北ビジョンが浮かび上がる。
（もし、モンスターカードだった場合、『スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン』の効果ダメージを僕が受け、僕のライフは……）
そうなれば、自分のライフは文字通り０となる。
ライフ０、それ即ち敗北。
しかも、己のエースモンスターによる効果ダメージを受けてでの敗北、これ以上の屈辱は存在しないだろう。

「正直オレも自分のデッキにどれくらいモンスターカードがあるのか忘れちまってる。さあ、どうする？」
「……最初から、このために僕の『スターヴ・ヴェノム』を破壊したっていうの？　博奕を僕にさせるために？」
相手が『インフェルニティ・デス・ドラゴン』の効果で自分の『スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン』を破壊しようとした時、脅しでスターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴンの効果を説明しても、相手は戸惑いもなく効果を発動させた。
「さあな。たかがデュエルだ、勝てばいいんだろう？」
「……ちっ」
皮肉のつもりなのか、明らかに勝とうとする意志が感じないにも関わらず、そのように答える鬼柳に対し、少年は少し苛ついたように舌打ちする。
勝つ気がないのであれば最初からこのような事はしないでほしいし、そもそもこのような博奕に付き合わされる事自体、少年の性には合わなかった。
「僕はその選択を拒否する。君の博奕に付き合う気はない」
ライフはまだ自分の方が有利。
せっかくライフを回復したのに、ここで勝負を焦って、相手にモンスターカードを引かせてしまってはソレが台無しになる。
「『インフェルニティ・ネクロマンサー』の効果発動。手札がゼロの場合、1ターンに一度、自分の墓地から『インフェルニティ』と名のつくモンスターを特殊召喚する」
「っ、そんな効果が……」
「甦れ、『インフェルニティ・デス・ドラゴン』！」
なるほど、どうやらあのドラゴンの厄介さは効果そのものよりも、『インフェルニティ』の名を持つ所にあるようだと少年は実感する。
せっかく自分のエースモンスターを破壊させてまでして倒したのに、レベルがたった3のモンスターの効果であっさりと蘇ってしまう。
だが、今に限っては、その効果が命取りになる！

「この瞬間、手札の『捕食植物コーディ・セップス』を捨て、場に伏せた速攻魔法『超融合』を発動!!」
「……何？」
「超、融合……？」
見た事もない融合魔法カードに鬼柳と瑠璃は一斉に訝しむ。
そのカードから感じる未知なる恐怖を、瑠璃は感じ取っていた。
――あれはヤバい、と。
油断したら、まるで自分すらもが呑み込まれてしまうような、そんな錯覚すら感じてしまう。
「『スターヴ・ヴェノム』が破壊された今、そのドラゴンの効果を使わせるわけには行かない。超融合は自分フィールドのモンスターばかりでなく、相手フィールド上のモンスターも融合素材にできる！」
「相手フィールドのモンスターも!?　それじゃあこの人の……」
「そ、君の言う通り、僕は『オフリス・スコーピオ』と、お兄さんの『インフェルニティ・デス・ドラゴン』を融合する！」
「罠カードオープン、『インフェルニティ……ッ!?」
伏せてあった『インフェルニティ・バリア』を発動しようとした鬼柳であったが、効果が発動できない事に、ようやく今まで変えてなかった表情を変える。
「無駄だよ。超融合に対してのカードの効果は発動できない」
「そんな……」
相手フィールドのモンスターすらも素材とし、そしてその効果に対しての介入は如何なるカードであっても許さない。
そんな融合が実在していいのかと、瑠璃は超融合というカードに対する理不尽さを呪った。まだ目の前の男性の正体を掴み切れていないとはいえ、アカデミアである人間に負けてもらった方がまだ安心できるというのに、よりにもよって少年はその男性のエースモンスターを素材にするというのだ。
「魅惑の香りで蟻を誘う花を持ちしサソリよ！　地獄より来たりし魔竜よ！　今一つとなりて、思いのままに全てを貪れ！　――融合召喚！　現れよ、レベル１０、グリーディー・ヴェノム・フュージョ

ン・ドラゴン！」
《グリーディー・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン》
融合・効果モンスター
☆１０／闇属性／ドラゴン族／攻３３００／守２５００
「捕食植物」モンスター＋元々のレベルが８以上の闇属性モンスター
スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴンよりも、更に禍々しいドラゴンが現れる。植物と一体化したような竜は、更にその花弁を生やして開かせ、ここに新たな脅威が誕生していた。
「攻撃力３３００、これじゃあ――――！」
そのドラゴンをみた瑠璃は心配そうに、鬼柳のフィールドを見る。
彼のエースモンスターであるインフェルニティ・デス・ドラゴンは素材としてフィールドから離れてしまい、守備力２０００のインフェルニティ・ネクロマンサーしか残っていない。
インフェルニティ・ネクロマンサーの効果は1ターンに一度、その効果はインフェルニティ・デス・ドラゴンを蘇生するのに使ってしまい、それも結果として相手に塩を送る事になってしまった。
「……ターンエンドだ」
なのに、鬼柳はフッと笑いながらターンエンドを告げる。
それが強い相手と戦える事に対する昂揚ではなく、自分を葬ってくれるかもしれないモンスターの出現に対する微かな喜びであるのを、瑠璃は感じ取る。
それで瑠璃は確信した。
（この人、本当に死のうとしてる、このデュエルで……そうなったら……）
次は、自分の出番だと、瑠璃は自分のデュエルディスクを見やる。
……とうとう、腹を括る時が来たのかもしれないと、瑠璃は目の前のデュエルの行方を見守った。
「僕のターン、ドロー！」
少年　手札２　→　３
「これで終わりだと思うかい？　僕は超融合のコストで手札から捨てた『コーディ・セップス』の効果発動！　このカードを除外し、墓地

の捕食植物モンスター二体を復活！　出でよ、捕食植物テッポウリザード、捕食植物オフリス・スコーピオ！」
《捕食植物テッポウリザード》（守備表示）
　効果モンスター
　☆３／闇属性／植物族／攻１２００／守１２００
《捕食植物オフリス・スコーピオ》（守備表示）
　効果モンスター
　☆３／闇属性／植物族／攻１２００／守８００
「オフリス・スコーピオの効果発動！　手札を１枚捨て、捕食植物モンスターをデッキから特殊召喚。ダーリング・コブラを守備表示で特殊召喚！」
　墓地とは違う、もう一体のダーリング・コブラが出現する。
「『ダーリング・コブラ』の効果により、僕は『融合』、または『フュージョン』カード一枚をデッキから手札に加える。僕は『融合』を選択。更に『テッポウリザード』の効果でカードを一枚ドロー！」
　少年　手札２　→　４
「そして魔法カード『融合』を発動！　場の『オフリス・スコーピオ』と『テッポウリザード』を融合する！」
「魅惑の香りで虫を誘う二輪の美しき花よ、今一つとなりて、苗床を踏み越えて何もかもを食らい尽くせ！　――――融合召喚！　レベル７、捕食植物キメラフレシア！」
《捕食植物キメラフレシア》
　融合・効果モンスター
　☆７／闇属性／植物族／攻２５００／守２０００
「捕食植物」モンスター＋闇属性モンスター
「更に手札から魔法カード、『エクストラ・フュージョン』を発動！　このカードは自分のエクストラデッキから融合召喚を行える。僕はエクストラデッキの捕食植物二体を融合！」
「エクストラデッキから!?」
「魅惑の香りで虫を誘う二輪の美しき花よ、今一つとなりて、その花弁で全ての呪いを食らい尽くせ！　――――融合召喚！　レベル８、捕

食植物ドラゴスタペリア！」
《捕食植物ドラゴスタペリア》
融合・効果モンスター
☆８／闇属性／植物族／攻２７００／守１９００
融合モンスター＋闇属性モンスター
相手のターンで融合召喚をし、さらにその次の自分のターンで融合召喚を２回行い、少年のフィールドには三体の融合モンスターが出そろう。
そのどれもが植物でできた怪物であり、虫は愚かそこいらのモンスターですら容易に食らい尽くす程の欲を持っていた。
「バトルだ！『キメラフレシア』で『インフェルニティ・ネクロマンサー』を攻撃！　紫炎（サポート・ソーン）の棘」
「手札がゼロで、俺のモンスターが破壊された事により、墓地よりインフェルニティ・リベンジャーを守備表示で特殊召喚！」
《インフェルニティ・リベンジャー》（守備表示）
チューナー（効果モンスター）
☆1→3／闇属性／悪魔族／攻０／守０
「続けてドラゴスタペリアでインフェルニティ・リベンジャーに攻撃！」
ドラゴスタペリアの口から放たれた毒の炎が、インフェルニティ・リベンジャーを飲み込む。
そして、ついに鬼柳の場はがら空きになった。
「これが通れば僕の勝ち！　グリーディー・ヴェノム・フュージョン・ドラゴンで、お兄さんにダイレクトアタック！」
「罠カードオープン、ガード・ブロック！　これにより俺に対する戦闘ダメージを０にし、カードを一枚ドローする！」
鬼柳　手札０　→　１
グリーディー・ヴェノム・フュージョン・ドラゴンの展開した花弁から放たれたビームが鬼柳に当たる直前、障壁が鬼柳の前に現れ、その攻撃は防がれる。
間一髪の所で、鬼柳は敗北を免れた。

負ける事を望んでいる筈なのに、その身体は自然と場に伏せた罠カードを発動させていた。
「躱されちゃったか……。まあいいよ、次こそ仕留めてあげる。僕はカードを2枚伏せ、ターンエンド」
「融合モンスターが3体に、伏せカードが3枚……これじゃあ……」
瑠璃は鬼柳と少年の場を見比べ、表情を絶望に染める。
少年の場には融合モンスター3体と、伏せカードが3枚。
それに比べて鬼柳のフィールドには伏せカード1枚のみ。手札はたったの一枚であり、既に勝敗は決しているようなものであった。
鬼柳にとってみれば負けた所で本望であろうが、瑠璃にとってはこれ以上にないくらい絶望的な状況である。
鬼柳が負ければ自分に出番が回ってくる、その時、自分はあの少年に勝てるのだろうか？
どんなに考えた所で、今は鬼柳のドローに全てを託すしかなかった。
「死が目前まで迫っている……やっとデュエルから解放されるのか、それとも……オレのターン、ドロー！」
手札　1　→　2
『……』

場を、沈黙が支配する。
鬼柳はそっと、自分が引いたカードを見やる。
鬼柳の手札にあるのは魔法カード『戦士の生還』が一枚と、そして

「たった今引いた魔法カード『バレット&カートリッジ』を発動！デッキからカードを4枚墓地に送り、カードを一枚ドローする」
デッキからカードを四枚選び、墓地に送る鬼柳。
そして、『バレット&カートリッジ』の効果により更に一枚ドローし、そのドローしたカードを、鬼柳はそっと覗き込んだ。
「――――」
そのカードを覗き込んだ鬼柳は、カッと目を見開く。

今まで無表情であっただけに、そこからは余程の驚愕が垣間見えた。

引いたカードは、《Ｄ（ダークチューナー）　Ｔ　ナイトメア・ハンド》

「ク、ククク……」

驚きを露わにしたかと思いきや、突然、笑いを堪える鬼柳。
何がそんなにおかしいのか、少年も、そしてデュエルを観戦していた瑠璃も訝しげな表情で鬼柳を見る。

「ク、ククク、ハハ、ハハハハ……」
その笑いはどことなく乾いており、かつ自嘲しているようにも見えた。
そのドローしたカードは、鬼柳にとっては、拭い難い罪の記憶を象徴するカードの一枚であったのだから。
「……どうしたのさ、いきなり笑いだして。狙いのカードを引けなくて、自暴自棄になっちゃった？」
「ハ、ハハ……自暴自棄、か。確かに、この状況でこんなカードを引いちまうとは……自暴自棄にもなりたくなる」
今まで無表情であった鬼柳が初めて見せたその笑みは、とても乾いていた。少年の言う通り、彼の心は文字通り『自暴自棄』になっているのかもしれない。
「……どうやら、どうあってもデュエルは、オレを離しちゃくれないらしい」

『バレット&カートリッジ』の効果でドローした『ナイトメア・ハンド』を再び見つめ、鬼柳は自嘲するように呟く。心から笑っているわけではない、ここまで来たら最早笑うしかない、といった感じのものだった。
「魔法カード『戦士の生還』を発動。墓地の戦士族モンスター1体を選択し、手札に加える。オレは墓地の『インフェルニティ・ドワーフ』を選択し、手札に加える」
元から手札にあった魔法カードを発動し、墓地のモンスターを鬼柳は手札に加える。
ならば、と少年と瑠璃は、鬼柳の引いたカードに注目する。
今まで無表情だった男を、あれほどまでに乾いた笑いに誘ったカード……それが気になったからだ。
「そして、『バレット&カートリッジ』の効果で墓地に送ったモンスターカード『馬頭鬼』の効果発動。このカードを除外し、墓地のアンデット族モンスター一体を特殊召喚する。オレは、墓地から『ダブル・コストン』を特殊召喚する」
《ダブルコストン》
効果モンスター
☆4／闇属性／アンデット族／攻1700／守1650
『バレット&カートリッジ』の効果により墓地に送られたモンスターの効果により、更に同じカードの効果で墓地に送られたモンスターがフィールドに出て来る。
二つの黒い怨霊のようなモンスターが姿を現した。
「そのモンスターは、一回で二体分のリリース素材にできるモンスター。……という事は……」
フィールドに出てきた『ダブルコストン』を見て呟いた後、少年は顔を見上げて鬼柳がドローしたカードを見つめる。
態々二体分のリリースにできるモンスターを特殊召喚した。
それはつまり――――。
「『ダブルコストン』を二体分のリリース素材とし、手札から『DT

ナイトメアハンド』をアドバンス召喚！」
《Ｄ（ダークチューナー）Ｔ　ナイトメア・ハンド》
効果モンスター（ダークチューナー）
☆１０／闇属性／戦士族／攻０／守０
特殊召喚された『ダブルコストン』がリリースされ、新たなモンスターが現れる。

「レベル１０……攻守０!?」
そのモンスターを見て驚く瑠璃。
態々二体分のコストとできるモンスターをリリースして召喚したにしては、そのモンスターあまりにもステータスが貧弱すぎた。
レベルが１０であるにも関わらず、攻守ともに０。
「……態々攻守０のモンスターをアドバンス召喚までして、そのモンスターに何か意味あんの？」
態々レベル１０であるにも関わらず、攻守が０のモンスターをアドバンス召喚した鬼柳に、さしもの少年も訝し気な視線を送る。
鬼柳の意図が、少年にも、そして瑠璃にも図りかねていた。

「『ナイトメア・ハンド』の召喚に成功した時、手札からレベル２以下のモンスターを特殊召喚できる」

「……レベル２以下？」
やけに範囲の狭い特殊召喚能力を持ったモンスターだ、と少年は訝しげな顔のままそう思う。少なくとも、この効果の為に『戦士の生還』で『インフェルニティ・ドワーフ』を手札に加えた、というのは理解できた。
「手札から『インフェルニティ・ドワーフ』を特殊召喚！」
《インフェルニティ・ドワーフ》
効果モンスター
☆２／闇属性／戦士族／攻８００／守５００

炎を纏った斧を構えながら、髭を生やした低身長の男が現れる。

「レベル2の『インフェルニティ・ドワーフ』に、レベル10のダークチューナー『ナイトメア・ハンド』をダークチューニング」

「……ダーク……？」

「……チューニング？」

ダークチューニング……更なる知らない単語に少年と瑠璃は混乱するばかりであった。

先ほど見たシンクロ召喚により、チューニングという行為が何を意味するのかはおぼろげながら理解できていた二人であったが、ここに来て『ダークチューニング』というこれまた意味の分からない単語が出てきたのである。

『■、■■■、■■■■ッ!!!』

不気味な声を発した『ナイトメア・ハンド』が体を広げると同時、『ナイトメア・ハンド』の身体から闇の瘴気が広がってゆき、更にそこから10個の光（レベル）が飛び出す。

『ウオ、オ〃、オ〃……』

その闇の瘴気は、傍にいた『インフェルニティ・ドワーフ』へと迫り、その闇の瘴気に、『インフェルニティ・ドワーフ』が苦しそうに呻きながらその闇へと飲み込まれてしまう。

闇の飲み込まれた『インフェルニティ・ドワーフ』を囲む、10個の星が、一斉にドワーフの身体に突き刺さった。

『ウ〃ア〃ア〃、ア〃、ア〃ッ、う〃ぅ〃ア〃ァッ!!!!』

10個の星は『インフェルニティ・ドワーフ』の身体を侵食し、やがてドワーフの体内の二つの星と打ち消し合う。

「な、何が起こってるの……？」

その光景を、瑠璃は顔を青ざめながら見守る。
闇の瘴気による球体で中の様子こそ見えないが、中から聞こえてくる『インフェルニティ・ドワーフ』の悲鳴らしき声から、頭の中で余計な想像を掻き立てられてしまう。
――――一体、あの中で何が起こっているのだ？

「漆黒の帳降りし時、冥府の瞳は開かれる……舞い降りろ闇よ　ダークシンクロ……ッ！」

ダークシンクロ……幾ばか苦しそうに胸を抑えながら、鬼柳は口上を喋る。
それに呼応するように、『インフェルニティ・ドワーフ』の身体が砕け散り、闇に染まった八つの星が稲妻のような物を発しながら、列を為して回転する。
やがて、闇の球体は大きくなる、まるで卵が孵化するように、その闇は広がっていく。
次に見えたのは、大量の瞳だった。
ボツ、ボツ、ボツと闇の中を、紫色の瞳が列を為して開かれ、やがてその開かれた大量の瞳に沿うかのように、影が顕になる。
そして、その影の胸の部分の、大きな瞳が最後に開かれると同時。
闇は晴れる。
そして――――

「出でよ！　レベル――8（マイナス）！　ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン！」

闇の中より出でし百眼の龍が、復活の雄たけびを上げた。

インフェルニティ

「あっアアァッ……!!」
あまりの頭痛に、片膝を着いてしまう鬼柳。
あのエクシーズモンスターとやらを拾い、それを見た瞬間、鬼柳はダークシグナーとしての自分を思い出してしまい、途方もない罪悪感に襲われていた。
些細な誤解から生まれた、己の過ち。
一つの目的を達成した事で、チームサティスファクションのメンバーは次の目標を模索し、それぞれの目標と日常を歩み始めた。
彼らは鬼柳からこのサテライトでも、自分達のような者達でもなせる事はあるのだと学び、自分の道を模索し始めた。
だが、自分にとってはそうではなかった。
まだ満足し足りない、もっと仲間たちと一緒に暴れたい。
だから、もっとデカイをしようとメンバーを再結集した筈なのに、仲間は次々と自分から離れていくだけだった。
今思えば当たり前の事だった、なのにそれにすら気付かなかったのは、当時の自分がそれだけ仲間が離ればなれになる事に対して恐怖していたのだろう。
「あぁ、あ……!」
後悔と罪悪の念が鬼柳の胸に込みあがってくる。
何で、自分は今までこうやって呑気に旅をしていたのだ？
旅立つ時、自分はどの面下げて遊星たちに別れを告げたのだ？
「アッ、アッ、アァッ!!!!」
崩れかけの建物の壁を、思い切り、何度も叩きつける。
（仲間だったのに、仲間だったのに……!!）
そう仲間だった。
最高の仲間だった、これ以上にないくらいに。
だからこそ、自分は。
（どれだけ離れていても、オレ達は仲間だって……遊星は言ってくれた筈なのに、オレはッ!!）

どれだけ離れても自分達は仲間だと、彼は言ってくれた。
なのに、自分はそれで満足できなかった。
セキュリティとの争いごとに彼らを巻き込み、更に捕まってしまった自分を助けようとしてくれていた遊星を、些細な誤解から恨み、憎み、裏切り者と罵ってしまった。
そして、ダークシグナーとして蘇り、筋違いな憎しみを増幅させながら彼と、彼の仲間たちを苦しませてしまった。
「何で……」
己の両手の平を眺めて、鬼柳は疑問を投げかける。他でもない自分に対して。
「何でオレは、生きてるんだ……？」
生きている事自体は別に疑問に思わない。
大法、遊星やその仲間たちが尽力して自分達をダークシグナーから解放でもしてくれたのだろう。
「何で、どうして、テメエはここで呑々と生きてやがんだ、鬼柳京介ぇ!!」
眼に止まった水たまりに映った己に対して、鬼柳は叫弾する。
仲間たちだけではい、自分は大勢の関係のない人々を地縛神の生贄にした。例え生贄にした人々が戻っているのだとしても、自分がそれを犯したという事実は変わらない。
「ちくしょう……オレは……オレは……ッ!!?」
その時だった。
両手を地面に付けて後悔の念を口にしていたその時……自分のデッキが紫色の輝きを放っているのが眼に入った。……正確には、エクストラデッキが。
「何だ、一体……」
不思議に思った鬼柳は、己のデッキの中身を確認する。
そして、その中にあるはずのないカードがあった。
「――――は？」
あまりにも信じられない出来事に、鬼柳は思わず口を三角に歪めてしまう。

紫色に、禍々しく輝くそのカードを、鬼柳が忘れる筈もなかった。
先ほど拾ったエクシーズモンスターとやらと同じく、レベルの列が左寄りの、黒い枠のカード。
「どう、して……どうして、オマエがここにいる……？」
目の前にカードに対して、疑問を投げかける。
ダークシグナーから解放された折には、このカードは既に自分の手元から消えていた筈だ。
『ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン』……何でオマエがここに……？」
地縛神と同じく、鬼柳の仲間であった遊星を苦しめたモンスター。
いや、ただ単に恐怖を与えただけの地縛神とは違い、このモンスターは大いに遊星を苦しめた。
仲間を苦しめた度合いでは、地縛神よりもこのモンスターの方が余程高い。
「ッ、これはッ……!?」
あまりの動揺に、手元が滑ってしまい、ワンハドレッド・アイ・ドラゴンの下に重ねてあったカードたちを落としてしまう。
そのカードたちを見た瞬間、鬼柳はさらに混乱してしまった。
「コイツは、ルドガーの奴が使っていた……ソレに、コイツも……は、ははは……」
最早、鬼柳は笑う事しかできなかった。
これらが自分の手元にあるという事は、おそらくダークシグナーの記憶を取り戻しているのは自分だけだろう……いや、そんな事はどうでもよかった。
「ハハハ……そうかよ、忘れさせちゃあくれねえって事か、そうだよなぁ」
何故だろう、あれだけ好きだったのに。
自分の全てだった筈なのに。
今では、そのデュエルが憎い。
仲間を苦しめるデュエルしかできなかった自分が、自分のデュエルが、どうしようもなく憎い。

それなのに。
「お前ら(カード達)はオレを離しちゃくれねえのか。こうやってどっかに消えちまっても、オレの手元に戻ってきちまうくらいに……オレの、あの拭い難い罪を忘れさせちゃくれねえってのか、ハハハ……」
自嘲するように、鬼柳は呟く。
何て無様、と鬼柳は自分を呪った。
その時だった。
「フッ、まだ生き残りがいたか！」
「生き残りのエクシーズ使い風情が、貴様もカードにしてやろう！」
「さあ、狩(ハンティング・ゲーム)りの始まりだ」
後ろから、声が聞こえる。
鬼柳はソレに振り向く。
青い制服に、仮面をつけた複数人の集団。
デュエルディスクを構えている様からして、自分にデュエルを挑もうとしているのか。
しかし、普通のデュエルではないと、鬼柳は直感的に思った。
ダークシグナーとして闇のデュエルを体験した鬼柳だからこそ、彼らが自分にしようとしている事がただのデュエルだという事ではないと分かった。
故に――――
「……いいぜ」
鬼柳は立ち上がる。
ついさっき拾ったデュエルディスクを展開し、虚ろな目で仮面の集団を見つめる。
「オレを、地獄に送ってくれよ」
その後、彼らオベリスク・フォースの姿を見た者はいなかった。

◇

鬼柳：
ＬＰ　１２５０

手札　０枚
フィールド　ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン（☆―８）
伏せカード１枚
少年：
ＬＰ　３０００
手札　０枚
フィールド　グリーディー・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン（☆１０）
捕食植物キメラフレシア（☆７）
捕食植物ドラゴスタペリア（☆８）
捕食植物ダーリング・コブラ（☆３）
伏せカード３枚
『グォオ……！』
異様な召喚法で召喚された百眼の竜を、少年と瑠璃は驚愕の表情で見つめる。
レベルとは違う概念の階級、ランクを持つモンスターならば知っている。チューナーモンスターを含むレベルの足し算で召喚するモンスターを決めるシンクロ召喚もまだ驚きはしなかった。
驚きはしたが、まだ理解ができる範疇だった。
しかし、そのモンスターは異様だった。
《ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン》
ダークシンクロ・効果モンスター
☆―８／闇属性／ドラゴン族／攻３０００／守２５００
「レベル……マイナス!?」
レベルは、負の整数の―８。最早デュエルモンスターズの常識の範疇すらも逸脱するモンスターである。見た事のない召喚法で出されたドラゴンの次には、理解不能の召喚法で出された理解不能のモンスター。
いよいよもって、この男が何者なのかを測りかねる瑠璃。
「レベルマイナス……こんなモンスター、アカデミアでは愚か、プロフェッサーからすら教えてもらった事ないんだけど……お兄さん、本

当に何者？　最初はシンクロ次元の人間かと思ったけれど……」
さすがに少年もこのモンスターの存在が理解不能なのか、目の前にいる鬼柳に問うが、鬼柳は無言のままデュエルを続ける。
無視された事に少し苛つく少年だが、次の鬼柳の宣言でその思いは千里の彼方へ吹っ飛んだ。
「『ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン』の効果発動。このカードが表側表示で存在する時、墓地の闇属性モンスター全ての効果を得る！」
「……ハ？」
その余りにも、出鱈目な効果に、瑠璃も少年も呆然としてしまう。
――何だ、その馬鹿げた効果は？
墓地にいるモンスター次第で、このモンスターは下手すればとんでもない化け物になるのではなかろうか。
「……まさか」
そこで、少年はハッと気付く。
目の前の男の墓地にいるモンスター達の事を思い出した少年は、身体を震わせた。
彼の『手札抹殺』、および『バレット&カートリッジ』で送った闇属性モンスター達……手札0という限定的な状況下でとはいえ、どれもが強力な効果を有するモンスター達ばかりだ。
――まさか、そのモンスター達全ての効果を使ってくるとでもいうのか？
「まずは『インフェルニティ・デーモン』の効果を発動する。特殊召喚時、手札が0枚の場合、デッキからインフェルニティと名のつくカード一枚を手札に加える。俺は永続魔法『インフェルニティガン』を手札に加え、そのまま発動する！」
『インフェルニティガン』……その効果は、実質召喚権を消費しない『インフェルニティ・ミラージュ』と何ら変わらない代物である、強力な永続魔法だった。
「永続魔法『インフェルニティガン』の効果発動。手札が0枚の時、このカードを墓地に送る事で、墓地から『インフェルニティ』モンスター二体を特殊召喚する。出でよ、『インフェルニティ・デーモン』、『イン

フェルニティ・デストロイヤー』！」
《インフェルニティ・デーモン》
効果モンスター
☆４／闇属性／悪魔族／攻１８００／守１２００
《インフェルニティ・デストロイヤー》
効果モンスター
☆６／闇属性／悪魔族／攻２３００／守１０００
『インフェルニティ・デーモン』の効果発動。特殊召喚時に手札が０枚の場合、『インフェルニティ』と名のつくカード一枚を手札に加える。オレは『インフェルニティ・ガーディアン』を手札に加える」
次々と色々なカード名が鬼柳の口から宣言される。
手札が０枚であるにも関わらず、この光景はまさしく異様だった。
「そして『ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン』の効果発動。墓地の闇属性モンスターの効果を得る。オレは墓地のチューナーモンスター『ユニゾンビ』の効果を得る！　手札を一枚捨てる事で、オレのフィールド上のモンスター一体のレベルを一つ上げる事ができる。オレは『インフェルニティ・ガーディアン』を捨て、『インフェルニティ・デーモン』のレベルを４から５に上げる！」
《インフェルニティ・デーモン》
☆４　→　５
「更に、『ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン』の効果により、墓地の『インフェルニティ・デス・ドラゴン』の効果を得る。『インフェルニティ・デス・ドラゴン』は手札が０枚の場合、１ターンに一度、相手モンスター一体を破壊して、破壊したモンスターの攻撃力の半分のダメージを与える。インフェルニティ・デス・ブレス！」
『インフェルニティ・デス・ドラゴン』の効果をコピーした『ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン』の口から、青白いブレスが放たれる。
効果の対象にされているのは……グリーディー・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン。
「ッ、罠カードオープン！『フュージョン・ガード』！　エクストラデッキから融合モンスター一枚を墓地へ送り、効果ダメージを無効に

する！」
『グリーディー・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン』は青白いブレスに飲み込まれ、そのまま爆散するが、少年が発動した罠カードによりダメージは無効となる。
そして、欲深き毒竜はただでは転ばず、フィールドのモンスターを全てを道連れにせんとその効果を発動させる
「この瞬間、グリーディー・ヴェノム・フュージョン・ドラゴンの効果発動！　破壊された時、フィールドのモンスター全てを破壊し、その攻撃力の元々の攻撃力分のダメージをそれぞれのコントローラーに与える！」
グリーディー・ヴェノム・フュージョン・ドラゴンの暴発した跡から、毒液が飛び出し、それはフィールド上の全てのモンスターに向かう。
しかし――――
「罠カードオープン『インフェルニティ・バリア』。手札が０枚で、オレのフィールド上に『インフェルニティ』と名の付くモンスターが存在し、相手が魔法、罠、モンスター効果を発動した時に発動できる。その効果を無効にして破壊する」
鬼柳の場のモンスター達と、少年の場のモンスター達の前にバリアーが現れ、グリーディー・ヴェノム・フュージョン・ドラゴンの効果破壊は無効にされる。
自分の場のモンスターも一緒に護ってくれた事に感謝……する事は少年にはできない。むしろ、今ので勝負を付ける事ができないのは痛手だった。
「……融合召喚に成功した『グリーディー・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン』が破壊された時、融合素材となった墓地のオフリス・スコーピオを取り除き、墓地からこのカードを特殊召喚できる。ただし、この効果で特殊召喚された『グリーディー・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン』の効果はこのターン無効になる……」
再び場に現れる猛毒竜。
しかし、破壊されても効果が発動しなくなったその竜は、鬼柳に

とっては既に的でしかない。
「『ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン』の効果発動、墓地の『インフェルニティ・ネクロマンサー』の効果を得る！　墓地から『インフェルニティ・デス・ドラゴン』を特殊召喚する！」
《インフェルニティ・デス・ドラゴン》
　シンクロ・効果モンスター
　☆８／闇属性／ドラゴン族／攻３０００／守２４００
「そして『インフェルニティ・デス・ドラゴン』の効果を再び発動！
インフェルニティ・デス・ブレス！」
　先ほどと同じブレスが、今度は『インフェルニティ・デス・ドラゴン』の口から放たれる。既に効果を失っている『グリーディー・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン』はもはや脅威ではなく、効果を発動しないまま発動される。
「グァァッ！」
　少年　ＬＰ　３０００　→　１３５０
　悲鳴を上げる少年。
　一気にライフポイントは削られ、既に鬼柳とのライフ差が１００ポイントの所まで追い込まれてしまう。
（ふざけないでよ……この僕が、こんな死んだ目をしたような奴に……！）
「罠カード発動！『エクストラ・シェイブ・リボーン』！　エクストラデッキにいたモンスターが破壊された時、そのモンスターよりレベルの低いエクストラモンスターを墓地から特殊召喚する！　再び出でよ、『スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン』！」
《スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン》
　融合・効果モンスター
　星８／闇属性／ドラゴン族／攻２８００／守２０００
　トークン以外のフィールドの闇属性モンスター×２
　自分の進化体のドラゴンの弔い合戦だといわんばかりに、少年の場に再び彼のエースモンスターが姿を現す。
「君の二体のドラゴンは『インフェルニティ・デス・ドラゴン』の効果

を使った事により両方とも攻撃できない！　そしてそれ以外の君のモンスターではこの『スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン』の攻撃力を下回っている。よしんば超えてきた所で、そして効果破壊した所で、『スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン』の効果が発動し、君は敗れ去る！

どうだぁ、これじゃあ手も足も出ないだろう!?」

デュエル開始時の余裕は最早何処にいったのか、少年は声は既に震えており、頬には汗が滴っていた。

だが、ハンドレス・コンボの前では、そんなものは無力だった。

「墓地のもう1枚の『馬頭鬼』の効果発動。自身を除外し、墓地からアンデット族モンスター一体を特殊召喚する！　オレは墓地から、『ユニゾンビ』を特殊召喚する！」

「……え？」

《ユニゾンビ》

効果モンスター（チューナー）

☆３／闇属性／アンデット族／攻１３００／守０

「レベル5となった『インフェルニティ・デーモン』に、レベル３のチューナーモンスター『ユニゾンビ』をチューニング！」

ここで、更なるシンクロ召喚をしてくるのかと、少年は冷や汗を掻きながらその光景を見る。

「地獄と天国の間（はざま）……煉獄より姿を現せ！　――――シンクロ召喚！

レベル８、『煉獄龍　オーガ・ドラグーン』！」

《煉獄龍　オーガ・ドラグーン》

☆８／闇属性／ドラゴン族／攻３０００／守３０００

更に、『ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン』や『インフェルニティ・デス・ドラゴン』と同サイズのドラゴンが現れた。

その巨大な赤みがかった黒い竜体には赤い宝石のようなものが所々に埋め込まれており、その姿は正に煉獄の主そのものであった。

「『ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン』の効果発動、墓地の『インフェルニティ・ドワーフ』の効果を得る。『インフェルニティ・ドワーフ』は、手札が０枚で俺のモンスターが守備モンスターを攻撃する時、そ

の守備力を攻撃力が超えていれば、その数値分の戦闘ダメージを相手プレイヤーに与える。『インフェルニティ・デストロイヤー』で、捕食植物ダーリング・コブラに攻撃！」

『インフェルニティ・デストロイヤー』の攻撃力は２３００、『捕食植物ダーリング・コブラ』の守備力は１５００。これだけならば貫通ダメージを受けても生き残れるように見えるが、『インフェルニティ・デストロイヤー』は手札０で相手モンスターを破壊したとき、相手に１６００ポイントの効果ダメージを与える。

その効果を知っていた少年は、最後のリバースカードを発動させた。

「ッ、罠カード発動、『聖なるバリア　―ミラーフォース』！　相手モンスターの攻撃宣言時、相手の場のモンスター全てを破壊する！」

「『煉獄龍　オーガ・ドラグーン』の効果発動。手札が０枚の場合、１ターンに一度、相手の魔法・罠カードの発動を無効にし、破壊する！」

「ハ――――」

効果を無効化され、フィールドの『ミラーフォース』は無惨にも砕け散っていく。

罠カードを無効化された事で、『インフェルニティ・デストロイヤー』の攻撃もまた続行される。

このままでは貫通ダメージと効果ダメージの両方が少年を襲ってしまうが、それでも負けを認めない少年は足掻く。

「墓地の『タスケルトン』の効果を発動！　このカードを除外する事で、相手モンスターの攻撃を一度だけ無効にする！」

幸いにも、最初のターンで鬼柳が『手札抹殺』で自分の墓地に落としてくれたカードの効果により、何とか持ちこたえる。

しかし、厄介な攻撃モンスターがまだ残っている。

「『煉獄龍　オーガ・ドラグーン』で、『捕食植物ダーリング・コブラ』に攻撃。『煉獄龍　オーガ・ドラグーン』は自身の効果を使用したターン、エンドフェイズ時まで攻撃力が５００ポイントアップする！」

《煉獄龍　オーガ・ドラグーン》

攻３０００　→　３５００

「煉獄（インフェルニティ・カオス・バースト）の混沌破却」
オーガ・ドラグーンの口から放たれたブレスが、捕食植物ダーリング・コブラを飲み込む、このままでは２０００の貫通ダメージで少年のＬＰは０になってしまう。
だが、まだ生き残る手段が少年にあった。
「墓地の『捕食植物ドロソフィルム・ヒドラ』の効果発動！　墓地の『捕食植物』モンスターと除外されてるモンスターを入れ替え、戦闘ダメージを半分にする！」
少年　ＬＰ　１３５０　→　３５０
「……すごい」
その様子を見ていた瑠璃は、思わずそう呟いた。
男の正体など関係なしに、手札０枚の状態からここまで逆転させたこの男のデュエルの腕に、単純に見惚れてしまった。
「これが、『インフェルニティ』……あの人の使うモンスター達」
まるで、モンスター達が自然とあの人に集まっていくみたいだと、瑠璃は感嘆する。
しかし、瑠璃のそんな思いとは裏腹に、鬼柳は表情を変えず、虚ろな目で自分の場に並んだ三体の龍を見やる。
（やはり、デュエルは、俺を離してはくれないのか……）
「だが、これで君のバトルフェイズは終了する！　まだデュエルは終わって――――」
「いや、これで終わりだ」
「……え？」
「『ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン』の効果発動。墓地の『インフェルニティ・ミラージュ』の効果を得る。『ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン』をリリースし、墓地の『インフェルニティ・デーモン』と『インフェルニティ・ネクロマンサー』を特殊召喚する！」
《インフェルニティ・デーモン》
効果モンスター
☆４／闇属性／悪魔族／攻１８００／守１２００
《インフェルニティ・ネクロマンサー》

チューナー（効果モンスター）
☆３／闇属性／悪魔族／攻０／守２０００
「『インフェルニティ・デーモン』の効果により、デッキの『インフェルニティ・バースト』を手札に加える」
「……いい加減にしてよ。いつまで君のターンを続けて――――」
延々としたコンボを見せつけられ、苛立つ少年。
最初は自分を適度に楽しませてから、自分から自滅してくれる少年の理想の相手かと思いきや、自分をくだらない博打に巻き込み、あまつさえこんな長々と相手のターンを見せつけられては、さしもの少年の堪忍袋の緒が切れる所だった
「これで最後だ。手札から魔法カード『インフェルニティ・バースト』を発動。俺の場の『インフェルニティ』モンスター一体につき、８００ポイントのダメージを相手プレイヤーに与える」
「なッ……」
一枚の魔法カードから発動される効果ダメージにしてはあまりにも高すぎる数値に、少年は絶句してしまう。
「一体につき……８００ポイント？」
「俺の場には『インフェルニティ・デス・ドラゴン』、『インフェルニティ・デストロイヤー』、『インフェルニティ・デーモン』、『インフェルニティ・ネクロマンサー』の計４体の『インフェルニティ』モンスターが存在する。
――――よって、お前に３２００ポイントのダメージを与える」
赤いエネルギーの奔流が、少年へと襲いかかる。
もうこれ以上のダメージを防ぐ手段など、少年には持ち合わせていない。
場にも、墓地にも、なに一つとして使えるカードはなかった。
「ハ、ハハ……」
自分が負けるという可能性を万に一つたりとも信じない少年にとっては、逆にそれが新鮮なのか、それともこの男が操るデッキの狂い具合に呆れただけなのか、どちらにせよ笑いがこみ上げてくるしかない事に違いはなかった。

３２００ポイントものダメージの詰まったそのエネルギーの奔流が、自身へ迫ってくるのを見て、少年はようやく、己の敗北を認識する。

「僕が、敗ける？　ハ、ハハハ、アハハハハハハハッッッ!!」

少年　ＬＰ　３５０　→　０

狂ったように嗤いながら、少年の身は赤いエネルギーの奔流に飲まれていった。

レジスタンス

荒廃し、今や笑顔や活気が消滅した町、ハートランド。
その中で、鬼柳は首にかけたハーモニカを口に当てながら、歩いていた。
『～♪　～♪』
出て来る音色は、今の鬼柳の悲しみと後悔を表す旋律だった。
些細な誤解からダークシグナーに落ち、仲間と大勢の人々を苦しませた自分に対する責め苦であるにようにも聞こえた。
鬼柳はハーモニカを吹くのをやめない。
虚しい風がコートの布を揺らす。
その風に乗るように、ハーモニカが奏でる虚しさも一層増す。
まるで鬼柳の人生を表すかのように、自分で作った仲間を、絆を、己自身の手でまやかしにしてしまった人生の虚しさを表すかのような音が、延々と響いていた。
『～♪　～♪』
鬼柳は、歩みを止めない。
延々とハーモニカを吹きながら、とある広場に出る。
普段は人々の活気と笑顔に溢れていたその広場は今では見る影もない……侵略者達の衆でうごめいていた。
「……」
囲まれている事に気付き、鬼柳はハーモニカを吹くのをやめ、ピタりと静止する。
周りを見渡せば、そこにはアカデミアの者達でいっぱいだった。
「ハハハ、こんな所で呑気にハーモニカなんて吹いてやがる」
「おかげで見つけやすかったぜ！」
「さあ、狩りの時間だ！」
獲物を見つけた侵略者達は、一斉にデュエルディスクを構えて鬼柳を睨む。
その中で、鬼柳は動揺した様子を見せず、ハーモニカから手を離した。

獲物を見つめる視線に囲まれながら、ポツリと漏らした。
「……まさか、こんなんで本当に釣れるとはな……」
虚しそうに、そう呟く。
その声には呆れの感情すらもが見えない。
チームサティスファクションの頃は、こんな逆境、仲間と共に乗り越えてやろうと燃え上がっていたのだろうが、今の鬼柳はそんな思いなど湧いてこない。
ただ、カードを捲るだけの亡霊らしく、デュエルで死ぬだけだ。
パチン、と右手を上げて指を鳴らす。
それが合図となったのか、広場に設置されていたライトが一斉に明かりを灯し、広場に明かりが戻る。
「な、何だ!?」
「何が起こっている!?」
突然の出来事に頭が追い付かず、慌てるアカデミアの者達。
そもそも前提として、こんな危険な場所で呑気にハーモニカを吹いている人間などおかしい。その事に、アカデミアの兵士たちは気付くべきだった。
広場の出口がバリケードで塞がっていく。
もう逃がさんと言わんばかりに、アカデミアの兵士たちの逃げ道を塞いでいった。
「閉じ込められた!?」
今更気付いたのか、慌て始めるアカデミアの兵士たち。
――さあ、狩る楽しみは十分に味わったか？　今度は狩られる側の気持ちを思い知れ。
「ここから逃がす訳には行かない！」
その言葉と共に、建物の屋根から一人の人間が飛び立つ。
緑がかった黒いワイシャツ、反りあがった襟首よりむき出しになっているネクタイ、その上に黒いマントを羽織った少年。
名前はユート。
「覚悟しろアカデミア！　ここで貴様ら全員を葬ってくれる！」
同じく、青紫色のコートに赤いスカーフを着用した男が電柱の上か

ら飛び降り、アカデミアの兵士たちを睨む。
彼の名前は黒咲隼。
この二人だけではない。
次々と、複数人の人間が物陰から姿を現し、鬼柳を囲んでいたアカデミアの兵士たちを囲み、一網打尽にせんとデュエルディスクを構える。
「くそ、罠か！」
「道理でおかしいと思ったんだよ！　一人でハーモニカ吹きながら歩いてるなんて……!!」
「所詮はエクシーズ使いの残党風情！　返り討ちにしてやる……！」
個々で意気込みながら、デュエルディスクを構え返すアカデミアの兵士たちであったが、彼らは動揺を隠しきれない。
オベリスク・フォースでもなし、こういった状況には慣れていないのかもしれない。
お互い、次々とデュエルディスクを構え始め、広場の各所でデュエルが始まっていく。
「……オマエが、オレの相手か？」
「ふん！　エクシーズなどなんて返り討ちにしてやる！」

「デュエル！」

◇

ハートランドのデュエルスタジアムの中に作られた難民キャンプ。
融合次元のアカデミア兵の侵略から逃れた難民たちが暮らすそのキャンプの端っこ……どう見ても隅に追いやらんとばかりの出来立てのキャンプの中に鬼柳はいた。
あのデュエルの後、捨て台詞のようなものを吐いたアカデミアの少年が姿を消し、また当てもなくデュエルを求めて彷徨おうとした鬼柳であったが、助けた少女に引き留められ、この難民キャンプで世話になっている。

……とはいっても、ほとんど軟禁状態ではあったが。
『～♪　～♪』
ハーモニカを吹きながら、鬼柳は思いに耽る。
あの頃の、ダークシグナーの頃の自分を思い出しながら。
『人々の魂を生贄に、降臨せよ！　地縛神Ｃｃａｐａｃ　Ａｐｕ!!』
二体の『ゴースト・トークン』がリリースされ、アーティファクトのようなものが空中に浮かび上がる。やがて炎の地上絵の中に人々がそのアーティファクトの中に次々と吸収され、ソレを中心に天を穿つ巨大な光の柱が巻き起こり、それが止んだ直後、地面から巨大な巨人が現れる。
『我が神Ｃｃａｐａｃ　Ａｐｕよ！　宿敵シグナーに、裁きの鉄槌を振り下ろせェ!!』
巨大な巨人は、鬼柳のかつての仲間にその手を振り下ろす。
何が裁きだ、そんなものは理不尽の逆恨みでしかない――――あの時の自分を、いっそ殺してしまいたいくらいに、それは鬼柳の中に残った、『罪』という傷だった。
（何故思い出した？　あの記憶を、俺の拭い難い罪を……）
曲を一通り吹き終わり、デッキからカードを一枚取り出し。
それを見つめる。
（コイツさえ、見つけなけりゃな……）
《ラヴァルバル・チェイン》
エクシーズ／効果モンスター
★４／炎属性／海竜族／攻１８００／守１０００
レベル４モンスター×２
鬼柳がここにやってきて、そして瓦礫の中に埋まっていたデュエルディスクと共に眠っていた黒い枠のモンスターカード。
エクシーズモンスターというらしい。同じレベルのモンスターを複数枚重ねて召喚し、そのモンスターをオーバーレイユニットとして、使い捨ての能力に使用するモンスター。
（いや、遅かれ早かれ、同じだったか……）
コイツさえ見つけなければ、と思った矢先だったが、よくよく考え

てみればここではこのエクシーズモンスターの存在は当たり前のものらしい。難民や、レジスタンスのデュエルリスト達も皆、このエクシーズモンスターを使用していた。むしろシンクロモンスターを使う自分という存在こそが異端なのだ。
　エクシーズが当たり前のここでは、このモンスターを見つけなくても遅かれ早かれ自分の記憶は戻っていただろう。
「……？」
　テントの出口から物音が聞こえ、鬼柳はカードをデッキに戻してその方向を見やる。
　そこには、まだ十歳かそこらの男の子がテントの入り口から鬼柳を覗き込んでいた。
「えへへ……」
「またお前か」
「聞いたよ鬼柳の兄ちゃん。今日もレジスタンスの皆と一緒にアカデミアの兵士をやっつけたんだってね！」
　何がそんなに楽しそうなのか、男の子はそう言いながら鬼柳の隣に座る。
　この男の子は、つい最近になって姉と一緒に難民キャンプにきたばかりの子だった。両親をカードにされ、姉と一緒にハートランドを彷徨い、アカデミアの兵士に見つかって追われている所を鬼柳に助けてもらい、以降姉と共に鬼柳の事を兄のように慕っていた。
「僕もさ、鬼柳の兄ちゃんみたいに強いデュエルリストになって、アカデミアにカードにされた父ちゃんと母ちゃんを元に戻すんだ！」
「諦めろ。カードにされた者は、二度と元に戻る事は出来ない」
　まるで将来の夢のように笑顔で語る男の子に、鬼柳はそっけなく事実を突き返す。アカデミアがカードにした人々をどうするのかは鬼柳もレジスタンスの人間たちも分からないが、一部の難民やレジスタンスの人間たちがカードにしたアカデミアの兵士たちを焚火の中に投げ捨てている様を目撃していた鬼柳は、他のカードにされた人間もおそらく元に戻る事はないだろうと推測した。
「そんな事はないさ！　黒咲さんや、ユートさん、鬼柳兄ちゃんみたい

に強くなったら――――」
「デュエルは何もしてくれない」
自分のようなどうしようもない男の背中を追いかけるように言う少年を突き放すかのように、少年の言葉を遮って鬼柳は断言する。
「え？」、と呆然とする少年。
「こんな所にいるくらいなら、今すぐオレから離れてお前の姉さんの傍にいてやれ。デュエルに取り憑かれない内に……」
この子は強い。
自分と姉の目の前で両親をカードにされたにも関わらず、その眼は希望を失っていない。そんな子供に、命のやりとりをするようなデュエルを覚えてほしくなどなかった。
「兄ちゃん……」
そんな鬼柳としばらく一緒にいた少年だったが、鬼柳が以降取り合ってくれる様子がなかったので、渋々と自分の姉のいるテントへ帰っていった。

◇

場所は変わって難民キャンプにあるレジスタンスの本拠地。
そこの会議室で、三人の人間が会話をしていた。
一人はレジスタンスのリーダーであるユート。もう一人はソレと並ぶ彼の親友にしてレジスタンスのメンバーの一人、黒咲　隼。そしてその妹の黒咲　瑠璃である。
「それで瑠璃。奴は自分が何者なのか喋ったのか？」
「いいえ、何も……」
隼の質問に、瑠璃は申し訳なさそうに顔を俯かせながら答える。
そんな妹の姿に心を痛めつつも、隼はこの間瑠璃が連れてきた〝彼〟……鬼柳京介について考える。
鬼柳　京介……アカデミアに攫われそうになった瑠璃とアカデミアの少年の間に割って入り、デュエルで勝利して瑠璃を助けた男。
それだけならば素直に感謝できるのだが、それにしてこの鬼柳京介

という男はあまりにも正体が謎すぎた。
「チューナーモンスターとやらのレベルと、それ以外のモンスターのレベルを足して召喚するシンクロ召喚。……そして、マイナスレベルのモンスターを召喚するダークシンクロ……こんな事は言いたくないが、アカデミアと比べても彼は得体の知れない存在だ」
「ユート、だけど……」
「分かっている、瑠璃。君が連れてきた男は、確かに心強い味方だ。少なくとも、敵に回したくはない。それはオレも隼も同じ気持ちだ」
「……ふん」
鼻を鳴らしながらも、隼もユートの言葉を否定はしなかった。
信用できるかできないかは別にして、確かに彼の実力はユートも隼も認めていた。少数派であるが、彼に密かに憧れを持つレジスタンスのメンバーも出てきている。
「だがユート。オレは奴を信用できない。いや、信用するかしないかは別にしても、俺は奴の事が好かん」
「隼……」
「瑠璃を助けてくれた事に関しては感謝している。だが、お前も薄々は分かっているだろう。奴は強い。だが、奴のデュエルには、鉄の意志も鋼の強さも感じられない！　にも関わらず、奴は率先して最前線でアカデミアを相手に戦っている。……まるで、カードを捲るだけの亡霊のようにな」
「兄さん！」
さすがに言い過ぎだと感じたのか、瑠璃は兄である隼に怒鳴りつける。妹に怒鳴られては強くは出れないのか、隼は押し黙る。
しかし、その言葉を心底から否定する事は、ユートにも瑠璃にもできなかった。
彼はユートや隼と並んで、レジスタンスの先頭に立ってアカデミアと率先して戦っている。だが、それはユートや隼のようにいつかの笑顔に溢れたハートランドを取り戻すために戦っているわけではない。
「……ユート。オレは尋問班の様子を見て来る。何か情報があれば報告する。ではな」

〝彼〟の話をする内に居心地が悪くなったのか、隼はそう言って会議室から出て行った。
「何か、情報が手に入ればいいんだが……」
部屋から出て行った隼の背中を眺めた後、ユートはポツリと呟く。
ここ最近、アカデミアの攻勢がまた激しくなってきている。ここは別の難民キャンプを護るレジスタンスも既に壊滅寸前であるとのことだが、救援に行けるほどユートが率いるレジスタンスにも戦力の余裕はない。
先の作戦で、アカデミアの兵士を一人残してカード化し、残る一人を尋問班に預けてきた。これで何か情報が入ればいいなと願うばかりだとユートは思った。
「ユート、あの……鬼柳さんの事……」
「大丈夫だ瑠璃。オレも隼も分かっている。彼は心強い味方だ。今回の作戦も彼のおかげでうまく行った。瑠璃が彼を連れてきてくれたおかげだ」
「ううん、違うの。ユート、聞いて……」
「……どうしたんだ、瑠璃？」
僅かな間の後、瑠璃は口を開く。
「本当は……本当は分かってたの。彼を連れて来る前から……鬼柳さんが、デュエルで死にたがっているって事……」
「それは、オレと同じ顔をしたアカデミアの人間とのデュエルでか？」
「うん……」
そして、瑠璃はあの時の事を話した。
アカデミアの人間に追われている途中に、突如として割り込んできた鬼柳。その自分と同じ顔をしたアカデミアの少年もまた凄腕の融合使いで、次々と融合召喚を行って鬼柳をピンチに追い込んだ。しかし、その次のターン、瞬く間に逆転し、勝利をしたとの事。
デュエルに敗北し、ボロボロになったアカデミアの少年は。
『まさか……ぼくが、まける、なんてね……。この借りは、必ず返すよ。僕の名前はユーリ……覚えておいてよね。瑠璃って言ったっけ？君は後回しにして、まずはそこのお兄さんに先にリベンジしてあげる

よ!!』
ユーリ……ユートと同じ顔をしたアカデミアの少年はそう名乗り、デュエルディスクの光に包まれて消えていったという。おそらくデュエルディスクに内蔵した次元転送装置でアカデミアに帰還したのだろう。
その後、再び瑠璃の前から姿を消そうとした鬼柳を、瑠璃は引き留めた。
彼が得体の知れない存在だというのは百も承知だった。
だが、瑠璃の性分として放っておけなかったのもあるが、何よりあんな物(ソリティア)を見せられたら、もう引き留めないなんて選択肢は瑠璃の頭から抜けていた。
「鬼柳さんの実力なら……ユートやお兄さん、レジスタンスの皆の力になってくれるって思ったの。あんなの見せられて、そう思って……」
「……そうだな。彼は俺達の力になってくれている。だから、瑠璃が気に病む必要はこれ以上――――」
「それでも、ユート……私、恩人である彼を利用しちゃった……彼がデュエルで死にたがっているのをいい事に、私はハートランドの事情を彼に説明して……それで……」
段々と震えて来る瑠璃の声を聞き、ユートは顔を歪める。
ユートは瑠璃の元へ駆け寄り、彼女の手の上にそっと自分の手を重ねて、慰めるように声をかける。
「ありがとう、瑠璃。オレと隼のために、心を鬼にして彼を連れてきてくれたんだろう?」
「……ユート」
「それに、彼を利用しているというのなら、オレも同罪だ。それに彼が何故ああまでしてデュエルで死のうとするかは、これから知っていけばいい」
ユートとて、瑠璃が連れてきた男、鬼柳京介の事を信用しきれている訳ではない。それでも瑠璃を助けてくれた事に関しては心から感謝したし、彼が瑠璃を助けてくれたと知った時は、誠意と感謝を込め

て彼に頭を下げて、瑠璃と共に礼を言った。
彼にそんなつもりはなかったのか、最後までそっけない態度であったが。
「とにかく今はどうにかして、このハートランドからアカデミアを追い出す事だけに専念するんだ。オレと、隼と、皆と、そして彼と……」
「……そうね。ありがとう、ユート」
――――彼は、鬼柳京介は、アカデミアと、ハートランドのレジスタンスとの抗争を利用して、自分で自分を殺そうとしている。
それはユートや隼、瑠璃の眼から見ても明らかだった。
何故彼があのように死に急ぐのかは分からない。
その死に急ぐ行為が、結果として、レジスタンスのメンバーたちや難民たちが彼を徐々に信頼するようになっていっている状況は、あまりにも皮肉であるが。
隼が鬼柳を好かない理由はきっとそれなのだと、ユートは思った。
少なくとも、ユートや隼、そしてレジスタンスの皆は命がけでアカデミアの侵攻からこのハートランドの残った難民たちを守ろうとしているのに、彼だけは自分を殺すための戦いをしている。
その蟠りが、隼にとってはとてつもなく居心地が悪いのだろう。
だから彼は隼とは合わないし、共に作戦行動する時はできるだけ距離を開けていた。隼が彼に突っかかる時は、いつもユートが仲裁に入っていった。
（鬼柳さん……）
ユートは思う。
最近になって、自分の恋人に連れられてレジスタンスに入って来た男の事を。
（何故貴方がああまでして、自分を殺そうとしているのかは分からない。そもそも、貴方を利用してしまっている俺に、そんな事を知る資格なんてないだろう。ただ……）
しかし、ユートは思うのだった。
ユートは思い返す、共に肩を並べた時に見ていた、彼のデュエルを。
手札を捨て、ノーカードで相手を粉砕する無手札必殺（ハンドレス・コンボ）。モンスター

同士のレベルを足して、それと同じレベルを持つモンスターを召喚するシンクロ召喚。そして、ユートやレジスタンスの皆はまだ直接目にしていないが、マイナスレベルのモンスターを召喚するダークシンクロ。

そのどれもがユートにとって未知の、そして恐るべき力を秘めた物だった。

故に、だからこそ思うのだ。

（貴方のその強さは、デュエルや、自分に希望を抱いていない者が手にできる強さとは、オレにはとても思えない。本当の貴方はもっと――――）

もっと、デュエルに対して真っ当に、正直に、全てを捧げてきた人間なのではないか。

彼があんなにもデュエルを憎んでいるのは、逆に言えばそれだけデュエルを愛していた事の裏返しなのではないか。

全てはユートの憶測に過ぎないのだが。

（そして、何より貴方は勝ち続けている。オレ達レジスタンスが未だに叛逆を続けているように、貴方もまた勝ち続けている。貴方は、まだデュエルに対して希望を失っていないのではないかと、オレはそう思わずにはいられない。だから、鬼柳さん――――）

――――できる事なら、最後まで勝ち続けてくれ。そして全てが終わって、ハートランドに笑顔が戻ってきたら、貴方も一緒に笑顔を……。

その先を考えようとして、ユートは己の思考を振り切った。

今はそんな事を考えている場合ではなく、如何にしてこのハートランドからアカデミアを退けるかを考える時なのだから。

ユートの葛藤

ハートランドの難民キャンプに住むハートランドの住民の生き残りたち……その多くは家族や関係者をカードにされ、その無念を分かち合い、必死に胸を抱き寄せ合って生きている……なんていう綺麗ごとなどは残念な事に少なかった。

非日常との剥離から生じる不安と、常に己の命が脅かされている環境では、人の心は自ずと荒れていく。

むしろユートたちのレジスタンスが拠点とする難民キャンプはまだマシな方であったが、それがまったくないと言い難い。

その難民キャンプの中を、一人の男が歩いていた。

長い銀髪、右頬に刻まれた黄色いマーカー、風になびく黒いコート、首に下げたハーモニカ。その雰囲気も相まってどこか退廃的な空気を漂わせるその男の名は、鬼柳京介。

最近になって、レジスタンスに入って来た正体不明の男である。正体が不明なのは鬼柳があまり自身の事を周囲に話さない性格になってしまっている事が起因しており、それ故レジスタンスや難民キャンプの人々から不信感を買われているが、皮肉にも鬼柳の死にたがりとも取れるレジスタンスでの働きによって信頼は得つつある。

……鬼柳自身は本当に死のうとしているだけで、そういった意図は微塵もないのだが。

信頼こそ得つつはあるが、それはまだ前線での彼の戦いぶりを見ていたレジスタンスの一部のメンバーに限られ、噂や言伝でしか彼の活躍を聞いていない大勢の難民たちは彼に不信の眼を向けている。中には殺気を向ける者も少なくなかったが、鬼柳はそれに対して特に思う訳でもなかった。

危険なのは、アカデミアだけではない。

アカデミアの侵攻によって、心が荒んでしまった難民たちの中にも腐りきっている人間達はいるのだ。

そういった人間に限って優先的にレジスタンスから追い出されているので、表立ってそれを表にする人間は極めて少ないが。

（……どちらにせよ、俺が朽ち果てるには相応しい場所か……）
自分達サティスファクションによって統一され、セキュリティが台頭した事でデュエルギャングが姿を消して本当の意味での無気力となったあの頃のサテライトと、疑心と不信に溢れたこのハートランドのどちらの方がマシであるかは、鬼柳には分からなかった。だが、余所者である自分にとってこの何もかもが味方ではない状況は、己の死を願望とする鬼柳にとっては渡りに船の環境である。
「……あ」
「……」
そんな視線に晒された中で、鬼柳とばったり出くわした二人の少女が、呆然としながら鬼柳を見る。
一人は、この間鬼柳から助けられた少女、瑠璃。
そしてもう一人は、笹山サヤカという名前だったか、と鬼柳は記憶していた。
『……』
沈黙が場を支配する。
瑠璃やサヤカの方は何か言いたげな感じである一方、鬼柳は辺りを一瞥しながら周りの視線を確認する。
……彼女達は、余所者である自分とは違い、この難民たちを守るレジスタンスという立場にいる。自分と一緒にいる所を見られても、自分に対する不信が彼女達にも向けられる恐れがあると感じた鬼柳は、そのまま彼女たちの傍を通り過ぎようとした。
が。
「ま、待ってください……！」
さすがに無言で通り去られるのは応えたのか、瑠璃が慌てて引き留める。
瑠璃とて何故鬼柳が即座に立ち去ろうとしたのか理由は察しがついたものの、それ故の罪悪感が彼を引き留めてしまったのだろうか。
「……何か用か？」
「その……鬼柳さん、今日も……ユートや、兄さんの助けになってくれて……ありがとう！」

この場で引き留め続けていても、周りから彼の印象を余計悪くするだけだと感じた瑠璃は、素直にお礼だけを言う。曲がりなりにもレジスタンスの所属である自分が公衆の面前で、感謝の言を告げれば、多少なりとも周りも彼を少しは受けいれてくれるのではないかという気遣いだった。

自分勝手な理由で彼を引き留め、こうしてレジスタンスの一員として戦わせてしまっている自分が今、彼に唯一できる事といえばこれくらいしか思いつかなかった。

「……」

瑠璃な率直な感謝の言葉を鬼柳はどう受け取ったのかは分からなかった。

瑠璃に対してただ一瞥をくれるだけで、鬼柳はそのまま去っていった。

◇

「貴様ッ……」

ドン、と襟首を掴まれて、壁に押しやられる。

憤怒の形相を浮かべながら鬼柳の襟首をつかんでいる男の名は黒咲隼。「R（レイド・ラブターズ）R」というカテゴリーのデッキを操るエクシーズ使いの人間であったが。

「瑠璃の恩人だからと今日の今日まで我慢してきたが……もう限界だっ！」

「やめろ隼！」

「……」

相も変わらず無表情な鬼柳。

それが余計に癪に障ったのか、さらに腕の力を強める隼であったが、慌ててユートが止めに入る。

いよいよ予期していた事が起こってしまった、とユートは頭を痛めつつも、必死に隼を宥めようとする。

「貴様が何で死にたがっているのかはこの際どうでもいい!!　だが、

仮にもこのハートランドの難民たちを守るための戦いで、何故あのような戦法を取る!? 貴様の実力なら、そうしなくともう少し真っ当な手段で敵を倒せるだろう!!?」

止めて来るユートを気にも止めず、黒咲は今まで溜めてきた不満を鬼柳へとぶつける。ただの怒りではなく、それは鬼柳の実力を認めているからこその憤りである。

レジスタンスは如何な状況であろうと諦めず、どのような崖っぷちに立たされようが最後まで戦い続け、相手の喉元に食らいつく。レジスタンスのメンバーは皆そのような人間であるため、それならばどうとも思わないのだが、自らを崖っぷちに立たすような戦い方を繰り返す鬼柳にとうとう堪忍袋の尾が切れたのだった。

「ドローするカードによって運が左右されてしまうのは仕方がない。デュエルとは元来そういうものだ。だが、何故貴様は運に勝負を預けるかのような戦い方をする!? 今すぐあのカードをデッキから抜け!!」

黒咲が言う「あのカード」とは即ち、鬼柳が最近ちょくちょくアカデミアの兵士相手に使っているモンスターカード『インフェルニティ・リローダー』や『インフェルニティ・デス・ガンマン』の事であった。

そもそも何故こうなったのかは前の作戦でアカデミアの兵士を撃退した時までに遡る。相手のライフは未だ４０００のままで、場には『古代の機械混沌巨人（アンティーク・ギア・カオス・ジャイアント）』と『古代の機械参頭猟犬（アンティーク・ギアトリプルバイトハウンドドッグ）』という、難民やレジスタンスの面面からしてみれば憎き仇とも言うべきモンスターが並んでおり。

鬼柳の場には『インフェルニティ・リローダー』が一体、場に伏せカードが一枚という絶望的な状況だった。

『手札が０枚の時、「インフェルニティ・リローダー」の効果発動!』

『ハハハッ、今更何をしようが遅い!』

『デッキからカードを一枚ドローし、墓地に送る。それがモンスターカードだった場合、相手にそのレベルの数値×２００ポイントのダメージを与える。だが、それ以外のカードだった場合、オレは５００

ポイントのダメージを受ける』

『ついに運に縋ろうとするか、哀れだな、エクシーズ使いの残党風情が!!』

『……レベルは10だ』

『何っ……グアアアアァッ!!』　アカデミア兵　LP　4000　↓　2000

自らデュエルに取りつかれていると言うだけの事はあるのか、このような土壇場の状況でレベル10の『DT　ナイトメアハンド』を引き、相手は一気にライフポイントを半分も削られてしまう。

自身の死を求めている本人はともかく、見ている側としては心臓に悪い事この上ない戦い方である。

『リバースカード「ZERO―MAX」を発動。オレの墓地の「インフェルニティ」モンスター一体を蘇生し、蘇生したモンスターの攻撃力の数値未満のモンスターを全て破壊する』

『なッ……貴様の墓地には……』

『「インフェルニティ・デス・ドラゴン」を墓地より特殊召喚。攻撃力3000未満のモンスターは全て灰になる!』

巨大な薄ピンク色のエネルギー弾が炸裂し、鬼柳の『インフェルニティ・リローダー』とアカデミア兵の『参頭猟犬』が破壊される。

『「参頭猟犬(トリプルバイトハウンドドッグ)」が……だが、貴様のドラゴンではこの『混沌巨人(カオス・ジャイアント)』の攻撃力を超えられ……』

『「インフェルニティ・デス・ドラゴン」の効果により、「古代の機械混沌巨人」を破壊し、その攻撃力の半分のダメージを与える。インフェルニティ・デス・ブレス!』

『馬鹿な……グアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!』　アカデミア兵　LP　2000　↓　0

最後は鬼柳のエースモンスターとして幾度となくレジスタンスに貢献してきた『インフェルニティ・デス・ドラゴン』の効果により、勝利を掴んだ鬼柳。

何度も言うが、ここで別に『インフェルニティ・リローダー』の効果を使わなくとも、墓地に溜まった墓地利用できるモンスターや『イ

ンフェルニティ』モンスターの効果で如何ようにもやりようはあった筈なのに、自らを死に追い込む危険性のある博奕効果を態々選択したのだ。

とてもだが、見ていられる戦い方ではなかった。

「貴様には分かるまい……失った者の気持ちなど……仲間を失った者の無念など……分からぬからこそ貴様はそうやって戦場で遊んでいるッ！」

「隼……」

「……」

壁に押しつけながら鬼柳を睨む黒咲。

その視線を真っ向から受けつつも、無言のまま、そして虚ろな表情のまま黒咲を見つめる鬼柳。少なくとも『自分が戦場で遊んでいる』という事に対する否定の言葉は口にしていなかった。

アカデミアの兵士に『インフェルニティ・リローダー』を破壊される度に、『もう少し遊ばせてくれてもよかったのに……』と幾度か呟いた事があるので、否定しようがない。

「俺とて、貴様に瑠璃を助けられていなかったら、何度発狂していたか分からん。その点では貴様に感謝しているし、他の皆よりも多少冷静でいられる……だが、それも限界だ！」

デュエルで勝てばよい、という訳ではない。確かに勝たなければ意味はないが、だからといって下らないロシアンルーレットに興じる理由にはなり得ない。

それ以外に縋る手段がないというのであれば仕方ない。そのロシアンルーレットの当たる確率を少しでも上げる方法があるというのであればまだ許容はできる。

だが、この男にそういった物などはなかった。正に〝行き当たりばったり〟、〝自暴自棄〟、その言葉が当てはまった。

「貴様には関係ないだろうが、これだけは言わせてもらう!!　これ以上あんなふざけた戦いを続けるようであれば、オレは貴様と共に戦う事などできん!!」

乱暴に鬼柳の襟首から手を離し、黒咲はそのまま部屋から出て行っ

てしまう。
鬼柳の事が信用できないのもある。だがそれ以上に、肩を並べて戦っている筈なのに、その実その肩を並べて戦っている相手はただ自分を破滅させるために戦っているという蟠りが、黒咲にとってどうしようもなく鬼柳という男を不快にさせていた。
「……」
部屋に取り残されたのは、鬼柳と、ユートのみ。
壁に寄り掛かった体勢から立て直す鬼柳を尻目に、ユートはハァ、とため息を吐く。
鬼柳京介という男は瑠璃を助けた、鬼柳京介という男を瑠璃が戦力として連れてきた……こういった二つの要素が重なって、たった今部屋から立ち去って行った黒咲は今まで耐えていたのだろうが、ついに限界を超えてしまったか。
瑠璃に対して「彼の事はこれから知っていけばいい」と言ったユートであったが、自分のそういった見積はあまりにも甘すぎたと実感せざるを得なかった。
「鬼柳さん。正直に言うが、俺も隼と同じ気持ちだ。もうオレや隼の前であんな戦い方はしないで欲しい」
「……」
「確かに、早期に決着を付けるという意味ならばあの戦術はむしろ有効だった。だが、それでも運に勝負を任せるような真似を目の前でされる仲間の気持になってほしい」
「……仲間、か……」
ユートの「仲間」という言葉に反応し、若干であるが伏し目がちになる鬼柳。その虚ろな瞳の奥には底知れない後悔の念が渦巻いているのを、ユートが感じ取れる事はなかった。
「隼はともかく、オレはもう貴方の事を仲間だと思っている。だから、どうか……」
「……さあな、デッキってのは気紛れだ。どのカードを引くかで自分の運命も決まる。デュエリストを勝たすも負かすも、全てはデッキの気分次第なのさ」

「ッ!!　鬼柳さんッ――――」
「……だが、何故かオレは未だに勝ち続け、ここにいる」
遠回しに自分は反省しないという風な言い回しをしながら去っていく鬼柳に対して、さしものユートも耐えきれず食いかかろうとするが、直後に振り返った鬼柳の言葉によってそれも遮られる。
いや、そんなユートの行動を止めたのは言葉ではなく、その乾いた笑みだった。
まるで己自身を嘲笑うかのような、底知れない自嘲じみた笑みが、執拗にデュエルの中で己の死を求める男の妄執が、ユートの動きを止めたのだ。
「鬼柳さん……」
「じゃあな。また、オレを終わらせてくれるようなヤバいデュエルをさせてくれよ?」
そう言い残して、鬼柳も部屋から出て行く。
取り残されたのはユート一人のみ。
ユートは鬼柳が閉めたドアを暫し見つめる。
(鬼柳さん、やはりもう……〝これから〟では駄目なのかもしれない)
自分が瑠璃に言った言葉を思い出す。
『彼が何故あそこまで死にたがるのかは、これから知っていけばいい』
(〝これから〟では、もう遅い。早く、彼を真っ当な〝レジスタンス〟のメンバーとして迎え入れる為には、もう……)
緩慢な考えである事は自覚していた。
そもそも、鬼柳からは一度たりとも自分をレジスタンスに入れてくれとは言っていないし、鬼柳にとって〝レジスタンス〟とは自分を殺すための手段の一つに過ぎないのだろう。そんな彼の心を利用して、彼を〝戦力〟として使ってしまっているのは他ならない自分だ。
彼に突っかかる黒咲が悪い訳でも、ましてや彼自身が悪い訳でもない。
(無理矢理にでも、鬼柳さんの心を引き出すしか。だが……)
――――自分に、それが出来るのだろうか?

ふと、己のデッキに目線を移し、そんな考えが頭を過る。
デッキの一番下にあるカード、『ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン』。ユートが最も信頼するカードにして、エースモンスター。
（『ダーク・リベリオン』……オレの全力をぶつけたとして、それが彼の心に届くのか？）
鬼柳京介という男の実力は未知数。
アカデミアの兵士を次々と蹴散らし、勝ち続けている様を見るに、相当な実力を持っている事は既に明白。
更に、彼はまだ自分達レジスタンスに底を見せてはいない。
『ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン』……おそらく彼の本当の切り札であろうドラゴン。レベルがマイナスの数値で、更には墓地の全ての闇属性モンスターと同じ効果を得る規格外のモンスター。
実物を見ていないユートは、その恐ろしさを直接垣間見た事はない。
そのモンスターの目撃者もレジスタンスでは二人しかいない。その二人でさえそのドラゴンが現れたデュエルを観戦していただけで、直にその恐ろしさを味わったのは、そのデュエルの相手だった自分と同じ顔のアカデミアの人間のみだろう。
彼は、そのドラゴンを自分達の前で出した事はない。彼の心と同じように。
（いや、問題なのはそこじゃない。今のオレの心で、彼の心を引き出せるのか？）
『心』を見せない彼の事を考えて、ふとユートは自分を顧みる。
自分の掌を見つめ、己のしてきた所業を振り返った。
（多くの人間をカードにしてしまった……報復のためとはいえ、オレもまたアカデミアと同じように、人間をカードにッ……!!）
仕方ないといえば、仕方ないのだろう。
カードにしたアカデミア兵たちを難民に見せなければ、難民たちを安心させる事などできなかった。自分達の心も納まらなかった。
そして、今も尚、納まってなどいない。
今でも、カードにしたアカデミア兵たちを焚火に投げ込んだり、破

り捨てたり、時にはデュエルディスクにセットして『使えねえカードだ』と罵って弄んだりするレジスタンスのメンバーや、難民たちが多く見受けられる。
そうでしか、心の安寧を保てないのだ。
それは、ユートだって例外ではない。
だから――――
一枚のカードを手に取る。
『融合』……決められた素材を墓地に送り、エクストラデッキから融合モンスターを融合召喚する魔法カード。
ユート達ハートランドの住民にとっては忌むべき象徴のカードである。
（まずは、鬼柳さんの心を引き出すためには、それ以前にオレの心と向き合わなければ、駄目なんだろうな……）
『融合』カードに対する憎悪を必死に抑え、迷いの心を持ちながらも、ユートの瞳は何かを決心していた。

その心に、一歩……

アカデミアの人間達は、別にデュエルをしなくともエクシーズ次元の人間をカード化する事ができる。ソレに対して、エクシーズ次元の人間達は当初アカデミアの人間に対抗する術が見つからず、途方に暮れていた。

何とかしてアカデミア兵の一人を捉えてカード化する機能を自分達のデュエルディスクに組み込む事こそ成功したが、それだけではアカデミアの兵士たちをカード化する事はできなかった。

更にアカデミアの侵攻が進むにつれ、アカデミアのデュエルディスクの解析を進めた結果、デュエルディスクにデュエリストをカード化から守っている機能がある事が発覚し、それをエクシーズ次元のデュエル会社の技術者がカード化、およびそれから守る機能を付与したデュエルディスクの製造を秘密裏に始め、それをレジスタンスに配った。

難民たちが辛うじてカード化から逃れたのはこのデュエルディスクに付加された機能のおかげである。

互いにカード化に対しての耐性があり、そのデュエルディスクを持つ人間をカードにするにはデュエルで勝たなくてはならない。

アカデミア側にも、レジスタンス側にもそのような条件が整った結果、かろうじてレジスタンスの抵抗が身に結ぶようになったのである。

……もっと、早い時期にこの技術をアカデミアから奪う事ができていれば、少なくとも今の現状は回避できたかもしれない、とユートは何度も思ったかは知れない。時は既に遅しといえど、そう思わずにはいられなかった。

「止めだ！『ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン』でダイレクトアタック！　反逆のライトニング・ディスオベイ！」

「うわあああぁッ!?」

最早叛逆すべきモンスターがいなくなった相手のフィールド。最早叛逆する必要すら無意味なフィールドを、叛逆の牙が蹂躙するとい

う皮肉。
相手のＬＰが０になるとともに、互いのデュエルディスクがデュエル終了の合図が鳴る。
それを確認したユートは、『ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン』の実体化を解かぬまま、アカデミア兵に歩み寄る。
そして、そのままデュエルディスクのカード化機能を作動しようとした。
が。
「ッ!?」
怯えた表情で、自分を見上げるアカデミア兵を見て、ハッとユートは我に返る。
同じだった……アカデミアの侵攻に怯え、カード化される事を恐れる難民たちと、その表情に違いはなかった。
「た、頼む！　見逃してくれ!!」
「……ッ」
持ち前の甘さ故、カード化のボタンを押す事をユートは戸惑ってしまう。
今まで自分の敗北を認められずに、力なく伏せてしまう相手が大半だった故、こうして命乞いをしてくる相手は久しくいなかった。
「な、なんでもするから、なあ!?」
「……ディスクを外せ」
「……え？」
「デュエルディスクを外せと言っているッ!!
「ひぃ!?　分かった！」
デュエルを始める前の威勢の良さは何処に行ったのか、アカデミア兵はデュエルディスクを慌てて外す。
「地面に置いて、ディスクから離れて、そのまま手を上げろ」
若干、自分の雰囲気を和らげながら、ユートは相手に言い放つ。
言われた通りに、相手は地面にディスクを置き、手を上げながら離れた位置に立つ。
これで相手は人間をカード化する手段と、カード化から身を護る手

段を失い、一方でユートはいつでも相手をカード化できる。
完全に相手を無力化したのであった。
「……もう、ここの者達に手を出さないと誓うか？」
コクリ、と素早くうなずくアカデミア兵。
「俺達レジスタンスに、アカデミアの情報を言えるか？」
「それは……」
言い淀むアカデミア兵。
仲間たちを裏切る行為に忌避を感じているのだろうが、あいにくとそんな時間をユートは与えるつもりはない。
「できないのなら、選択肢は一つだ」
言って、ユートはデュエルディスクに手を添え、カード化の準備を行う仕草を取る。
「ま、待ってくれ！　言う、言うから、その手を止めてくれ!!　お願いします！」
「ならさっさと言え。その後は何処へでも消えるといい」
「オ、オレ達アカデミアは、アークエリア・プロジェクトという壮大な計画で……」
その時だった。
男から離れていた筈のデュエルディスクが、突如として光り出す。
まるで、男の言葉を遮るかのように。
「ッ⁉　まさか、そんな……待ってくれ、うわあああああああああアアアアアアッ!!?」
突如として光り出したデュエルディスクから、光線が放たれ、それは持ち主であったアカデミア兵に照射される。
「なッ……!?」
突如とした出来事にユートも驚愕の声を発す。
今までこんな前例はなかった。
持ち主をカード化しようとするデュエルディスクなど、これまでの戦いでは見た事がなかったのだ。
「嫌だ、嫌だ……オレはこんなッ――――!!」
気付いた時には、男の姿はなかった。

あるのは、直前に男がユートの方へ向けて投げ放った一枚のカードと。
空中に舞う、一枚のカードのみ。
ひらひらと、落ち葉が舞うが如く、ゆっくりとそのカードは表面を上にして、ユートの足下へ落ちる。
やがて、ユートの足下に、二枚のカードが並んだ。
「あ……」
そのカードが何なのかは、見るまでもなかった。
向こうが散々此方にしてきた仕打ち、こちらもまた幾度とやりかえしてきた分からない仕打ち。
その証が、ユートの足下にあった。
――――自分が、彼にアカデミアの情報を吐くように言わなければ。
――――素直に、自分が彼を見逃していれば。
――――いや、そもそもアカデミアが彼をここに派遣してこなければ。
「くそッ……！」
ドカン、と地面に拳を叩き、そう呟く。
それでも、自分達は叛逆を続けなければならかった。
そうしなければ、こうなるのは自分達なのだから。

「……なあ、アンタは俺達を裏切らないよな？」
別の離れた戦場で、共に行動していたレジスタンスのメンバー神月アレンが、一掃した敵を前に、突如としてそう聞いてきた。
鬼柳は何の事か分からず、？のマークを頭に浮かべながらアレンの方を一瞥するだけであった。
ちなみに、前回の事でついに鬼柳にキレてしまった黒咲の一件で、今回の作戦から黒咲と鬼柳は別行動させる事がレジスタンスの総意として決まっていた。
「前に……いたんだ。俺達にデュエルの楽しさを教えたくれた、そん

な人が……」
「……」
「なのにソイツは、俺達を笑顔にするとか謡いながら、何処かへ消えちまった!!　ハートランドがこうなった直後まではまだいた筈なのに……」
　アレンは拳を強く握りながら鬼柳に語る。
「デュエルの楽しさを教えてくれた……その直後にこのアカデミアの奴等が攻めてきて……俺らはより楽しめた筈のデュエルも楽しめなくなっちまった!!　あいつさえ来なければ……まだこんな辛い思いをせずに済んだのに……その直後にあいつは逃げやがったんだ!!」
「……」
「あいつは臆病物だ、裏切り者だ！　こんな……辛いデュエルを味わされる直前に、楽しめるデュエルなんていう置き土産なんかしやがって……!!」
　要は気持ちの問題、そういう事だろう。
　これまでよりも更に楽しいデュエルを教わったのに、その直後に命のやりとりを行う辛いデュエルを強いられてしまった。
　上げて落とされたのだ。
　その当の本人は、その辛いデュエルを強いられる環境になった途端に、姿を晦ませた。その人物が直接悪い訳ではなくとも、恨まずにはいられない。
「……」
　裏切り者――その単語を聞いた途端、鬼柳は眉を僅かに潜める。
　あの日、些細な誤解から親友を恨み、死に追いやろうとした自分。
『遊星……この裏切り者ぉ!!』
「……そいつは、本当にお前達を裏切ったのか？」
「え？」
　今まで無口だった鬼柳が唐突に口を開いた事に、アレンは一瞬だけ呆然とする。
「ソイツが何故いなくなったかも分からずに、裏切り者と決めつけるくらいなら、ソイツを見つけてから理由を聞き出しても、遅くはねえ

んじゃねえのか？」
「……」
「理由も事情も聞かずに恨み続けていると、いつか後悔する時もある」
オレのようにな、という言葉を省き、鬼柳はアレンに背を向け、そのまま歩を進める。
アレンは鬼柳が急に喋り出した事に呆然とする一方で、鬼柳の言葉に思う所があったのか、神妙な表情でそのまま黙り込んでしまった。
今日もいつものようにレジスタンスのメンバーと共にアカデミアと戦い続け、己をデュエルから解放してくれる者を望む鬼柳。
あの日、とあるエクシーズモンスターを見つけてしまい、記憶が戻ってからその日常は変わる事はなかったかのように思われた。
「……鬼柳さん。帰ったら、オレとデュエルをしてほしい」
拠点へ帰る途中、ユートからそう言われるまでは。

◇

ユートと、あの鬼柳京介がデュエルをする。
その知らせは、瞬く間にレジスタンス中に広まった。
メンバーの心としては、まだレジスタンスに入ったばかりで更には融合でもエクシーズでもない召喚法を使う未だ得体の知れなさが残る鬼柳よりも、長い間レジスタンスのリーダーとしてメンバー達を引っ張って来たユートに傾いている。
だが、それを抜きにしてもこの対戦カードはレジスタンスのメンバー達の気を引く物としては十分すぎる程の効果があった。
同じレジスタンスのメンバー同士であるユートと黒咲は平和だったころのハートランドの時から互いの腕を競い合うライバル同士として幾度となくデュエルでぶつかり合っており、単純に見慣れていたというのもある。
戦い続きであるレジスタンスのメンバーとしては密かに別の娯楽を心の何処かで欲しているというのもあった。

そう思っていた矢先に、この対戦カードだ。興味を引かない筈もなかった。
「……来てくれたんだな、鬼柳さん」
ハーモニカを携えながら自分の目の前に立ってくれていた男、鬼柳京介に対して、ユートは感謝の念を込めて視線を向ける。
「……何故、オレとデュエルしようと思った？」
「……」
「オレなんかとデュエルをするよりも、お前にはやるべき事がある筈だ。仲間の命を背負っているのなら猶更な」
「簡単な事だ。そのやるべき事の中に、貴方とデュエルする事が入っているとオレが感じたからだ」
自分にデュエルを申し込んできた事に疑問を持った鬼柳が、その疑問をユートに投げかける。それに対してユートは真っ直ぐな目線でそれに応えた。
鬼柳から見ても、その眼には確固たる意志があるのだと感じ取れる。
「鬼柳さん。貴方はオレにこう言った、『自分はヤバいデュエルを求めている。だから好きなだけ自分を使ってくれて構わない』と。だが、そんな理由で、オレと隼が納得できる筈がない。共に肩を並べて戦う者として」
観客席にいた黒咲が、ユートのその言葉に賛同するかのように、ぎゅっと拳を握りしめる。隣にいた瑠璃はそんな兄と鬼柳を心配そうな表情で交互に見つめる。
「貴方が助けてくれた瑠璃は、オレと隼の助けになってくれるという理由で貴方をここに連れてきた。貴方はソレに対して何も言わず、オレ達も貴方をそのまま利用する形になってしまった。だから……せめて、知りたいんだ。何故貴方がそこまでデュエルで自分を追い込もうとするのか、何故あんなにも死にたがるのか……」
ありのまま本心を、ユートは鬼柳に告げる。
このデュエルを通して、少しでも彼の事を知りたい。
今までのようにアカデミア兵と戦いながら彼のデュエルを一瞥す

るのではなく、彼と直接デュエルをして、少しでも彼の心に触れたいのだと。
「ユート……」
ユートの心に感じ入る物があったのか、瑠璃は胸に当てた手をキュっと握りしめる。
本来ならば、それをするのは彼を直接連れてきた自分がすべき事であったのだろう……そんな罪悪感が瑠璃の胸を締め付ける。
だが、自分程度のデュエルの腕では鬼柳の心を動かす事ができないのは分かり切っていた。故に、ユートに託すしかない。
「どうしてもやろうって言うんだな？」
「ああ」
「……分かったよ」
鼻で溜息を吐いた後に、渋々と了承する鬼柳。
いくらデュエルが憎くなろうが、彼とてデュエリスト。挑まれたデュエルから逃げる事はできなかった。

互いにデュエルディスクを構えだす。

デュエルが始まるまでのわずかな沈黙。
その緊張感に、周りのレジスタンスのメンバーの誰もが息を飲み込み、デュエル開始の合図を待つ。
そこへ更に
「鬼柳兄ちゃーん!!　がんばれー!!」
いつの間にか会場に入り込んでいたのか、一人の少年が観客のレジスタンスの間を割って出て鬼柳に声援を送ってくる。後ろには少年の姉らしき少女までもが応援する弟の姿をニコやかな笑みで見守っている。
彼女とて、弟にとって、そして自分にとってのヒーローである鬼柳を心の底でひっそりと応援していた。
ちなみに、レジスタンスのメンバーではないこの姉弟がこの情報を聞きつけやってこれたのは、彼女が瑠璃と親しい仲だったからであ

る。
――――僅かでも彼を慕ってくれるハートランドの人間もいる。
その事実だけでも、瑠璃やユートは幾分かホッとしていた。
そんな少年の姿を一瞥して和らいだ心を元に戻し、再び鬼柳へと視線を向けるユート。
そして――――

『デュエル!!』

周りのレジスタンスのメンバーの一斉の掛け声と共に、両者はデッキからカードを五枚ドローした。

◇

「先行はオレが貰う！　手札から『幻影騎士団　ダスティローブ』を召喚！」
ユート　手札５→４
ますはユートの先行。
さっそく己の操るカテゴリカード『幻影騎士団』モンスターを場に出した。
《幻影騎士団（ファントム・ナイツ）ダスティローブ》
効果モンスター
☆３／闇属性／戦士族／攻８００／守１０００
「更に、オレのフィールドに『幻影騎士団』モンスターが存在する場合、手札から『幻影騎士団サイレントブーツ』を特殊召喚できる！」
ユート　手札４　→　３
《幻影騎士団（ファントム・ナイツ）サイレントブーツ》
効果モンスター
☆３／闇属性／戦士族／攻２００／守１２００
「これでオレのフィールドにはレベル３のモンスターが二体揃った！
オレはレベル３の『幻影騎士団ダスティローブ』と『幻影騎士団サ

イレントブーツ』でオーバーレイ！」
瞬間、ユートにフィールに銀河状の大きな渦巻が現れ、そこに同レベルの2体の『幻影騎士団』モンスターが吸い込まれてゆく。
「戦場で倒れし騎士たちの魂よ、今こそ蘇り、闇を切り裂く光となれ！
エクシーズ召喚!!」
馬の形した鎧に、更に人の上半身の鎧が組み合わさった、異様なモンスターが現れる。首がない代わりに霊魂を思わすような青白い炎が灯されており、例え死していようと、そこには使い手の叛逆の意志が垣間見える。
「現れよ！ ランク3、『幻影騎士団ブレイクソード!!』
馬のような鳴き声を高らかに鳴らし、魂の宿った騎士の鎧が大剣を鬼柳へと向ける。
《幻影騎士団ブレイクソード（ファントム・ナイツ）》
エクシーズ・効果モンスター
★3／闇属性／戦士族／攻2000／守1000
「ユートめ、1ターン目からもうエクシーズ召喚を……」
「……本気なのよ、ユートは。このデュエルで本気で鬼柳さんの心に踏み込もうとしてる……！」
観客席にいた黒咲と瑠璃はその試合の行方を見守る。
1ターン目からのエクシーズ召喚……ユートは、このデュエルで全力で鬼柳とぶつかろうしている。
観客席ごしでも、その意志がはっきりと読み取れた。
「カードを2枚伏せて、ターンエンド！」
ユート：
フィールド《幻影騎士団ブレイクソード》
セットカード　2枚
手札　1枚
「オレのターン、ドロー」
鬼柳　手札5　↓　6
そして鬼柳に最初のターンが周り、ドローフェイズに入る。
己の手札を暫し確認した後、カードを一枚手に取り、フィールドに

出す。
「手札から、『ＤＴ　スパイダー・コクーン』を特殊召喚。このカードは相手フィールド上にモンスターカードが存在し、自分フィールド上にカードが存在しない場合、手札から特殊召喚できる」
鬼柳　手札６　↓　５
《Ｄ（ダークチューナー）Ｔ　スパイダー・コクーン》
効果モンスター（ダークチューナー）
☆５／闇属性／昆虫族／攻０／守０
大きな球体に足が八本生えたかのように、異様な蜘蛛がフィールドに姿を現す。
「〝ダークチューナー〟……まさか……！」
今まで自分達の前では見せてこなかったというのに、もう見せて来るのかとユートは身構える。
ダークチューナー……あのデュエルで、彼がダークシンクロモンスターを召喚するのに使われていたモンスターの名前に付いていた単語だと、瑠璃から聞いている。
（来るのか、この最初のターンから……！）
「更に『インフェルニティ・ドワーフ』を通常召喚」
鬼柳　手札５　↓　４
《インフェルニティ・ドワーフ》
効果モンスター
☆２／闇属性／戦士族／攻８００／守５００
「そして魔法カード『ダーク・ウェーブ』を発動。自分フィールド上のモンスター一体を選択し、そのモンスターのレベルをその数値×－１にする」
鬼柳　手札４　↓　３
「……何？」
あまりにも常識外の効果を持つ魔法に、ユートは唖然とする。
モンスターのレベルの下限は、レベル１だ。
マイナスのレベルが存在しようと、それは彼の持つダークシンクロモンスター特有のものだと思っていたからだ。

「オレは『インフェルニティ・ドワーフ』のレベルを—2に下げる」
《インフェルニティ・ドワーフ》
☆2　→　—2
……なのに、自分の目の前で、普通のモンスターのレベルが負の値になっているではないか。
だが、そんな疑問を長く抱いている暇もない。
なぜなら、今鬼柳のフィールドに、ダークチューナーと非チューナーが揃ってしまったからだ。
「レベル—2となった『インフェルニティ・ドワーフ』に、レベル5のダークチューナー『スパイダー・コクーン』を……ダークチューニング」
その瞬間、『スパイダー・コクーン』の身体が黒い霧となって消えた後、そこから五つの星が飛び出し、『インフェルニティ・ドワーフ』の身体に侵入していく。
『ウ…うぉぉ……!?』
『インフェルニティ・ドワーフ』の身体に入り込んだ瞬間、五つの星は闇へと変わり。『インフェルニティ・ドワーフ』の身体は砕け散る。
残ったのは、円形に回転する七つの闇だった。
「星が闇に……」
「これで、光は闇となった。ダークシンクロ召喚は、チューナー以外のモンスター一体のレベルから、ダークチューナーのレベルを引いた数と同じレベルのシンクロモンスターを召喚できる」
「だからレベルがマイナスに……」
鬼柳からの淡々とした、説明を聞き、納得するユート。
非チューナーモンスターのレベルにチューナーモンスターのレベルを足すのがシンクロ召喚。ダークシンクロはその逆、非チューナーのレベルからダークチューナーのレベルを引くのだ。
「暗黒より生まれし者、万物を負の世界へと誘う覇者となれ！　ッ……ダークシンクロ……」
回転する七つの星の間に黒い稲妻のような物が迸り、闇の幕が降ろされる。

「現れよ！　レベル―７、『猿魔王ゼーマン』！」
降ろされた闇の幕より、王冠とマントを身にまとった筋肉質の猿が現れる。
紫色に輝く瞳、左手には小さな杖。
かつてとある精霊世界をマイナスに落とした魔王が、次元を超えてここに降臨した。
《猿魔王ゼーマン》
ダークシンクロ・効果モンスター
☆―７／闇属性／獣族／攻２５００／守１０００
「これが、ダークシンクロモンスター……」
未だ信じられない、という気持ちでユートはフィールドに現れた『ゼーマン』を見つめる。瑠璃から聞いた話を信じてなかった訳ではなかったが、それでも直接見ない事には実感が湧かなかった。
『なッ、レベル―７のモンスターですって!?』
『どうして直ぐに手札０にしないんだ!?』
『あのモンスターは一体……』
驚いているのはユートだけではない、周りのレジスタンスのメンバーはその存在すらも知られていなかった分、その驚愕はユートの比ではなかった。
（だが、瑠璃から聞いたあのドラゴンは出なかったか……）
ユートが最も警戒しているダークシンクロモンスター『ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン』。
だが、油断は禁物だ。
同じダークシンクロモンスターである以上、この『猿魔王ゼーマン』も何か厄介な能力を持っているに違いないとユートは身構えた。
「バトル。『猿魔王ゼーマン』で『幻影騎士団ブレイクソード』に攻撃。カースド・フレア！」
「だが、『幻影騎士団ブレイクソード』が破壊された時、墓地から同じレベル『幻影騎士団』モンスター２体を、レベルを１つ上げて特殊召喚する！」
ユート　ＬＰ４０００　→　３５００

『猿魔王ゼーマン』の杖から放たれた炎により、『ブレイクソード』はその身を焼かれてしまうが、反逆の騎士たちの魂は倒れる事を知らず、更なるエクシーズ召喚への布石を残してゆく。
《幻影騎士団ダスティローブ（ファントム・ナイツ）》
効果モンスター
☆3→4／闇属性／戦士族／攻800／守1000
《幻影騎士団サイレントブーツ（ファントム・ナイツ）》
効果モンスター
☆3→4／闇属性／戦士族／攻200／守1200
「『幻影騎士団』は倒れない！　例え打倒されようと、それは次なる反逆の牙に繋がっていく！」
「……カードを1枚伏せて、ターンエンドだ」
鬼柳：
フィールド　《猿魔王ゼーマン》
セットカード　1枚
手札　2枚
「オレのターン、ドロー！」
ユート　手札1　→　2
準備は整った。
これでユートの場にはレベル4のモンスターが二体揃った。
本来ならば相手の場に上級モンスターがいる状況が望ましかったが、そうも言っていられない。
「オレはレベル4となった『幻影騎士団ダスティローブ』と『幻影騎士団サイレントブーツ』でオーバーレイ!!」
先ほどと同じように、銀河状のエフェクトがユートのフィールドに出現する。
だが、そのエネルギーの規模は先の『ブレイクソード』の比ではない。
再び、二体の『幻影騎士団』モンスターが、その渦に飲み込まれていく。
「漆黒の闇より、愚鈍なる力に抗う、反逆の牙！　今降臨せよ、エク

シーズ召喚!!」
尾、腕、翼、そして顎。
ありとあらゆる部位に牙を纏った漆黒の龍。
凄まじい雷鳴と共に、ユートの象徴のエースモンスターが、姿を現す。

「現れよ！　ランク４、『ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン』!!」

《ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン》
エクシーズ・効果モンスター
★４／闇属性／ドラゴン族／攻２５００／守２０００
叛逆の雄たけびと同時に、それは力強き咆哮でもあった。
なんとしてでも目の前の凍り付いた男の心に必死に語り掛けようとするユートの叫びを代弁するかのように、その竜は咆哮する。

「『猿魔王ゼーマン』のレベルはマイナス。よって『ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン』のモンスター効果の対象外。だが、打つべき手は他にもある。永続トラップ『幻影剣（ファントム・ソード）』を発動！　このカードの効果により、『ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン』の攻撃力は８００ポイント上がる!!』
《ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン》
攻２５００　→　３３００
「バトルだ！　『ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン』で、『猿魔王ゼーマン』を攻撃！　反逆のライトニング・ディスオベイ!!」
『ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン』の翼が展開され、稲妻のような光が迸る。その凄まじいエネルギーを顎の刃に溜めこんだ漆黒の龍は、その刃を向けたまま『猿魔王ゼーマン』に突撃する。
攻撃力の差は８００。
迸る稲妻の刃が、そのまま『猿魔王ゼーマン』の身体を貫くと思われた、その瞬間。

「『猿魔王ゼーマン』の効果発動！　手札1枚をコストに、相手モンスター一体の攻撃を無効にする！」
「なにっ!?」
その刃は、見えない障壁に阻まれ、威力を殺されたところを『ゼーマン』の杖に跳ね返されてしまった。
これにより、『ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン』の攻撃は不発に終わる。
が、警戒すべき所はそこではなかった。
（手札1枚をコストに、相手モンスターの攻撃を無効……そうか、鬼柳さんはこのモンスターをアタッカーとして出した訳ではない!!）
態々手札1枚を消費してまで、相手のモンスターの攻撃を無効化する効果。
この効果は、鬼柳が使用している永続罠カード『デプス・アミュレット』とまったく同じ効果ではないか。
（このモンスターは、鬼柳さんの手札（ハンドレス）0を完成させるためのもの、だから最初にこのモンスターを出したのか……！）
「カードを一枚伏せて、ターンエンドだ！」
ユート：
モンスターゾーン　《ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン》
魔法&罠ゾーン　セットカード2枚
永続罠
手札　1枚
「オレのターン、ドロー」
鬼柳　手札1　→　2
「カードを一枚伏せ、ターンエンドだ」
鬼柳：
モンスターゾーン　《猿魔王ゼーマン》
魔法&罠ゾーン　セットカード2枚
手札　1枚
セットカード2枚では特に打てる手もないのか、鬼柳はそのままターンを終了する。

再び、ターンはユートに回って来た。
「オレのターン、ドロー！」
ユート　手札１　→　２
引いたカードを確認し、ユートは鬼柳のフィールドに視線を移す。
鬼柳の心へ踏み込む隙間を塞ぐかのように、鬼柳のフィールドに居座るマイナスの王。
（鬼柳さん……オレも瑠璃も、貴方の事が知りたい。貴方が何者なのか、貴方に何があったのか……）
故に、ユートはそのマイナスの王を睨み付ける。
（このモンスターは邪魔になる。鬼柳さんの心にオレの想いを届かせるためには、向き合って戦うしかない。　鬼柳さんにも、そしてオレ自身の心にも……！）
まずは、あの邪魔な猿魔王を排除する。
そう思い至ったユートは、先ほど引いたカードを発動させる。
「魔法カード『鬼神の連撃』を発動！　この効果により『ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン』のＯＲＵ（オーバーレイユニット）を全て取り除く事で、このターン、『ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン』は二回攻撃できる!!」
ユート　手札２　→　１
『ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン』の周りを取り巻いていた二つの光が消え、代わりに激しいオーラが『ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン』の身体を包み込む。同時に、漆黒の龍は力強い咆哮を上げる。
「『ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン』で、『猿魔王ゼーマン』を攻撃！　反逆のライトニング・ディスオベイ！」
再び稲妻を纏った反逆の牙が『猿魔王ゼーマン』に向けられ、その牙は一直線へと進む。しかし、やはりというべきか、直前で鬼柳の手は己の手札へと差し伸べられ、残り一枚のカードが取られる。
「手札を1枚墓地に送り、『猿魔王ゼーマン』の効果発動！　戦闘を無効にする」
鬼柳　手札１　→　０

再び、反逆の牙は防がれてしまう。
「だが、『鬼神の連撃』の効果により、『ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン』はもう一度攻撃できる!! 反逆の、ライトニングディスオベイ!!」
防がれた牙が今一度マイナスの王へと向けられる。
今度こそ、『ゼーマン』の破壊を免れる手段は何一つとしていない。
フィールドにリリースするモンスターも、捨てる手札も既にない。
今度こそその牙は、『猿魔王ゼーマン』の胴体を貫く。
「クッ!?」
鬼柳　ＬＰ４０００　→　３２００
凄まじい爆発音と共に散っていく『猿魔王ゼーマン』。
『ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン』の攻撃の凄まじい衝撃もあってか、それをほぼ直で受けた鬼柳は、咄嗟に体を庇ってしまう。
「オレのフィールドのモンスターが破壊された事により、罠カード『道連れ』を発動！ フィールド上のモンスター一体を選択し、破壊する。オレは『ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン』を破壊」
「だが、永続罠『幻影剣』を破壊する事により、『ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン』の破壊は免れる！」
《ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン》
攻３３００　→　２５００

「オレは、これでターンを終了する！」
ユート：
モンスターゾーン　『ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン』
魔法＆罠ゾーン　セットカード２枚
手札　１枚
ターンの終了を宣言したユート。
……その時……
「……フッ、流石、コイツ等を率いているだけの事はあるな」
ようやく、鬼柳はほんの一瞬だけだが笑みを浮かべていた。

「お前はただ勝とうとしている訳じゃない。デュエルでオレの心を引き出そうとしているのだろう？　分かるよ……オレの仲間にそっくりだ」
「貴方の仲間？　いや、それよりもそれが分かっているなら――――」
「悪いなユート。駄目なんだよ、どうでもいいんだ」
ユートの言葉に被せるかのように、一瞬だけ笑った顔をいつもの虚ろな表情に戻して鬼柳は言う。
「……何が、どうでもいいんだ？」
「生きていても、死んでいても……オレのターン、ドロー！」

鬼柳　手札０　↓　１
曖昧な返答しか返さぬまま、鬼柳はカードをドローする。
これ以上は語らせるのは無理だと判断したのか、今は鬼柳のターンの行く末を見守る事にした。
「永続罠『強化蘇生』を発動。自分の墓地に存在するレベル４以下のモンスター一体を選択肢し、そのレベルを一つ、そして攻撃力を１００ポイント上げて特殊召喚する。オレは『猿魔王ゼーマン』を特殊召喚」
「何っ!?」
《猿魔王ゼーマン》
ダークシンクロ・効果モンスター
☆―７　↓　―６／闇属性／獣族／攻２５００　↓　２６００／守１０００
そのステータスと強力な効果故、ユートも、そしてレジスタンスのメンバーの皆が失念していた。ダークシンクロモンスターのレベルはマイナスの値。
それは即ち、低レベルのサポートカードの恩恵を受けられるという事に他ならないのだった。
「更に、手札から『ＤＴダーク・エイプ』を通常召喚」
《Ｄ（ダークチューナー）Ｔ ダーク・エイプ》
効果モンスター（ダークチューナー）
☆２／闇属性／獣族／攻０／守０

そのモンスターの出現に、ユートは思わず冷や汗を流してしまう。
――また、新しいダークチューナーモンスターが現れたのだ。
そして、ユートはハッとなる。
（今の『猿魔王ゼーマン』のレベルは―6……この『ダーク・エイプ』のレベルを引いたら……まさか……）
――レベルは、―8（マイナス）
「レベル―6となった『猿魔王ゼーマン』に、レベル2のダークチューナー『ダーク・エイプ』をダークチューニング」
――全て、計算尽くだったのだ。
態々『ゼーマン』の効果でハンドレスにし、更に『ゼーマン』が破壊される事まで見越して、レベル調整と同時の蘇生までやってのけた。
全ては――

『ダーク・エイプ』の身体が消え、二つの星が飛び出す。
二つの星はそのまま『ゼーマン』の身体へと入り込み、それと同時に闇に変わる。
「漆黒の帳降りし時、冥府の瞳は開かれる、舞い降りろ闇よ!!」
『ゼーマン』の身体が砕け散り、八つの闇が飛び出す。
先ほどと同じように、それらの闇は円系に回転し始め、やがてそれらの間を黒い稲妻が迸る。
「ダークシンクロ……!!」
凄まじき轟音と共に、巨大な闇が広がってゆく。
そのエネルギー量は、先の『ゼーマン』の時など比ではない、正真正銘の冥府へと誘う闇。
その闇に潜みし冥府の瞳が、次々と開けられる。
上から、二つの道に分かれるかのように、紫色の瞳が次々と開かれてゆく、その目の列に沿うかのように、一匹の龍の影が顕となる。
そして中心の最後の瞳が開かれると同時、闇は晴れる。
「出でよ！　レベル―8！　『ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン』！」

全ては――――この龍への布石だったのだ。